

永遠のフィレーナ
3
悪夢への挑戦
作／首藤剛志
絵／高田明美
AM
JuJu



しゅどうたけし
首藤剛志

'49年8月18日生まれ。脚本家・小説家。19歳でシナリオデビュー。最新作は「銀河英雄伝説〜わが征くは星の大海〜」。小説家としては「ゴーショーグン」シリーズ、「永遠のフィレーナ」シリーズが代表作。



たかだあけみ
高田明美

3月31日東京生まれ。キャラデザイナー・イラストレーター。「クリィミーマミ」「うる星やつら」などを経て、最新作は「きまぐれオレンジ★ロード」(TV、映画)「機動警察パトレイバー」(ビデオシリーズ)。









永遠のフィレーナ 3

悪夢への挑戦

首藤剛志

主な登場人物



フィレーナ

デビス帝国に滅ぼされた国・フィロセラ王家唯一の後継者。男として育てられた闘技士（バトラー）である。



リラ

フィレーナの名目上の妻。フィレーナがじつは女だという秘密をただひとり知っている。



ネスト

闘技のシナリオを書く闘技作家。フィレーナに興味を持ち、フィレーナのドラ脱出を助けたあと行方不明。



アマネラ

遊牧民族の女性。フィレーナに、〝産み出す者〟としての女のすばらしさを教える。



ウト

帝国の首都・ボーの剣鍛冶（かじ）。フィロセラの生き残りで、フィロセラ再興の鍵を握る人物。

口絵・本文中さし絵／高田明美



目次

プロローグ

ここに……、デビス帝国帝国機密情報兵団——通称……、黒い悪魔への報告の概略がある。
奴隷階級に属する闘技士フィレーナについてである。

——フィレーナは、海の魂を意味する言葉で、海洋民族では、きわめてありふれた名前で、男女差なくつけられている——（略）
——デビス新暦五一年、地方都市ドラで闘技士としてデビュー。小柄、非力でありながら、闘技試合に勝ち続けたものの、何を思ったか脱走——（略）
——山賊集団、リトル・ラリテニア（かつて滅亡したラリテニア国の残党）と行動を共

にする――（略）
――リトル・ラリテニア壊滅作戦の際、死亡……。ただし死体は発見されず――（略）
――関係者と見られる者
帝国人民　闘技作家ネスト（死亡）
闘技演出家バラバ（死亡）
浮草地区（デラシーナ）の医師キル（死亡）
奴隷階級　踊り子ミリカ（脱走後死亡）
同　リラ（脱走後死亡）
闘技指導員ゼナ（以下多数死亡）
山賊集団　首領ラリス（以下全滅）

――（以下略）

だが、この報告書には書かれていないことがあった。
フィレーナが、かつてデビス帝国に滅ぼされた海洋国フィロセラの王家の後継者だということ――。
そして、闘技士でありながら女性だったこと――。
そして、なによりフィレーナとリラは、リトル・ラリテニアから脱出して、生きていたこと――。

そして今……、フィレーナは、もの心ついたころから夢見ていた海をその瞳で本当に見つめていた。

第1章

混濁の海

海――。

フィレーナが、かつてその瞳で一度も見たことのなかった海――。

しかし、胸の奥ではいつも思いをよせていた海――。

海は、今、フィレーナの目の前にあった。

海は、青く果てしなく広がっていた。

その膨大(ぼうだい)な水のひろがりは、フィレーナが見慣れていた闘技士養成所の近くにあった湖とは、あまりに違っていた。

海は、たくましく、しかし、たおやかだった。

あらあらしく、けれど、やさしかった。

フィレーナは思わず靴(くつ)を脱ぎ、素足を波打ち際に踏みだした。

春が近いとはいえ、海水は肌を刺す冷たさだった。

だが、フィレーナは、少しも寒くなかった。

素足をくすぐる波は、さわさわと、しかしじわっと肌にしみ入ってきた。

それは今までフィレーナが聞きたくて聞けなかった海の言葉に思えた。

海は、海だけが知っているさまざまなことを、フィレーナに、波のざわめきまで告げようとしているのかもしれなかった。

この世界のはじまりから今まで——。

海が見続けてきたこの世界の生き物たちのいとなみ——。

フィレーナが生まれた海洋民族の国、フィロセラのこと——。

そして、フィレーナはこれからどう生きて行けばいいのか——。

打ちよせる波は、ただの一度も、同じ姿、同じ波音を使わず、打ちよせるたびに、数知れぬ波の泡のはじける感触で、饒舌に、けれど、ひかえめに、フィレーナに何かを話し続ける。

フィレーナについてきたリラも、海に足をふみ入れた。

リラは波の感触に、一瞬、体をふるわせ、それから大きく息を吐き出すと、夢を見続けているようなまなざしで呟いた。

「海……これが海なのね」

「ああ、これが海さ……海なんだ」

フィレーナは両手を広げると、海に抱きつくように、そのまま海面に倒れ込んだ。

……いや、海に抱きつくんじゃない……。海に抱かれるんだ……

強い潮の刺激が頭へつきぬける。

鼻から海水が入ったのだ。

むせる。でも、かまわない。
耳の奥が重い。波の音がにぶく響く。
耳に海水が入ったのだ。
なに、かまうものか……。
海水の浮力で、体がふわりと持ち上がった。
「あっ……」
フィレーナは、声にならない叫びをあげた。
身体のまわりの全て(すべ)が、フィレーナをやわらかくつつんで、上へ上へと運んでくれている。
まるで泡のゆりかごに乗せられているようだ。
……これだ、この感じだ。これを感じたかったんだ……
それは、闘技のとき、相手と有利に戦うために、跳躍靴(ジャンピングシューズ)を使って空気を斬(き)りさくように跳躍(ジャンプ)する感触とは、あまりに違っていた。
同じ上昇でも、これはやすらかでなめらかだった。
海で泳いだことのないフィナーレにとって、こんな感触ははじめてのはずだった。
だが、肌が、いや体の奥底で、フィレーナは海をなつかしんでいた。
フィレーナはふと思った。
……もしかしたら、母親に抱かれているときの乳児は、こんな気持ちでいるのかもしれない……。そして、もしかしたらそのときの感触を、人は、いつまでも体のどこかで記憶している

のかもしれない……

……母親か……

フィレーナはふっと笑った——。

口元から空気の泡がもれて、ほおをつたわって上へ流れていく——。

……まるで涙がほおをつたわりおちていくのとさかさまだね……

フィレーナには母親の顔も名前も肌ざわりも記憶になかった。でも、今の感触はどこかで憶えがある。

体のどこかが憶えている。

……今、僕が誰かに抱かれているとするなら、それは、人間じゃない……。僕は今、海に抱かれているんだ……。僕にとって、海は、生まれ落ちてから二度と出会えなかった母親のようなものかもしれないな……

フィレーナは、体を思いっきりのばすと、手足を力いっぱい動かした。

ぐいっと、フィレーナの体は波にさからって前進した。

泳ぐなどという言葉自体が海の中では無用な気がした。

ただ海に身をゆだね、行きたいところに向かって手足を動かせばいいのだ。

地上を、人が歩くことを意識せずに自然に歩いているように、フィレーナは海の中で、泳ぐことを意識せずに泳いでいる気がした。

……海ってやつは……

フィレーナは思った。
……そうさ、僕にとって母親なんだ……
フィレーナは泳ぐのを止めると、手足をのばし、海に浮かんだまま空を見上げた。
青い空に白い雲がゆったりと流れていく。
フィレーナも、白い雲のようにゆったりと波の動きに身をまかせた。
闘技士（バトラー）として育てられ生きてきたフィレーナにとって、それは、いままでなかったやすらぎのときだといえた。
「フィレーナ！」
リラの声が潮騒の向こうから聞こえた。
「ん？」
フィレーナは、胸のあたりの深さで立ちあがった。
ヒューッ！
いきなり空気を斬りさく音がした。
ピチッ！
フィレーナの傍（そば）の海面が音をたててはじけた。
何かがフィレーナに向かって飛んできたのだ。
フィレーナは腰の硝子（クリスタル）ナイフを抜いて身構えた。
「フィレーナ！」



リラの叫び声が再び聞こえた。
「しまった！」
波打ち際のリラを見たフィレーナは、思わず唇を噛（か）んだ。
リラの前に毛皮を着て弓を持った男が立っている。
しかも男の傍には、毛の長い茶色の大きな狼犬（ウルフドッグ）が、リラに向かって身構えていたのだ。
……なんてこった。僕（ぼく）ともあろうものが……、海を見て舞い上がってしまったのか……。油断にもほどがある……
確かに、元闘技士（バトラー）のフィレーナとしては、うかつとしかいいようがなかった。
フィレーナとリラは、帝国からの逃亡奴隷（エスケープクレチア）であり、この海岸は人けがないとはいえ、帝国領土なのだ。
いや、むしろ人けがないからこそ、よけい目立つともいえる。
しかも、のこのこ冷たい海に飛び込むなど、妙だと思わないほうがおかしい。
いきなり矢は水面を走ると毛皮の男のほうに戻った。
「早く海から出なさい」
毛皮の男が叫んだ。
「出ないと、この女の子もあなたも命はないわよ」
フィレーナはその声を聞いてまじまじと男を見つめた。
毛皮を着た男——いや、男と思っていたその声はどう聞いても女だった。

女は用心深く弓を降ろすと中型剣を抜き、フィレーナを威嚇(いかく)しながら弓を拾った。
矢についたひもの先は、女の腰のベルトに結びつけられている。
女は背中にしょった弓入れ(アローケース)に矢をしまうと、フィレーナにいった。
「あなたたちは何？　どこから来たの？」
フィレーナは黙っていた。
逃亡中の奴隷(クレチア)だなどと答えられるはずもない。
女は、ぐいっと剣をフィレーナの胸元につきつけた。
「答えなさい。あなたたちが帝国人民(エンパイアラー)でないことは分かっているわ」
リラが思わず口を開いた。
「なぜ、それが分かるの……。あ……まずい！」
リラはあわてて口を手でふさいだ。
フィレーナは溜(た)め息(いき)をついて首を振った。
……リラのやつったら！　これじゃ、自分から帝国人民(エンパイアラー)ではないことを白状したようなもんだよね……
女はリラのあわてた様子にふっと微笑を浮かべた。
「やっぱりね、さあ答えなさい。あなたたちがここへ来た目的はなんなの」
「答えたくない」
フィレーナはぶっきらぼうに答えた。

相手を刺激するいい方だった。
だが、ここまで相手に近よっていれば、つきつけられた剣をかわして、リラを助ける自信は十分あった。
まして、相手は女なのだ。
女は、口元に微笑を浮かべてフィレーナにいった。
「答えなければ、死んでいただくことになるわ」
話している内容のきつさにしては妙に女っぽい言い方だった。
よく見ると、毛皮の女はうっすらと化粧をして、口紅(ルージュ)さえつけている。
武骨な毛皮を身にまとい、弓を背おい、剣を抜いている姿とは、あまりにアンバランスだった。
しかも、同じ女であるにしても男として育てられたフィレーナと違って、口調はあくまで女性らしいのだ。
「女の人とは戦いたくないんだが……」
フィレーナがそういい終えぬうちに、
「甘く見ないで！」
女は、いきなり剣をつきだした。
一瞬早く、フィレーナの腰のナイフが剣を受け止める。
フィレーナは、リラの手を引くと後ろにとびすさった。

いつものフィレーナなら、すかさず相手の剣をはじき落とし、ナイフで相手の胸を貫いていたかもしれない。
しかし、思わず後ずさりしたフィレーナは、いささか驚きあわてていたのだ。
……これが女の剣さばきか？　女でこれほど剣を使える人がいるのか？……
確かに、今までフィレーナが戦って来た男の一流闘技士たちの腕前とは比較にならないかもしれない。
だが、相手は女だ。
男として育てられたフィレーナは、女でありながら女の行動の理屈がよく分からないときがあった。
衝動的というか、ヒステリーというか、論理的でないというか、でたらめというか、ともかく身辺にいるリラですら、ときどきフィレーナにとって意味不明な行動をして、理解不能……、お手上げになることが多かった。
そんな女という種類の生き物が、闘技士（バトラー）並みの力を持っているとしたら、慎重にならざるをえない。
ましてフィレーナは、女性を相手に戦おうなどという気持ちは、最初から持っていない。
知らず知らずのうちに手かげんをして、そこにすきができてしまうだろう。
……えらいことになったなあ……
フィレーナは、舌打ちして毛皮の女を見た。

だが、フィレーナに剣を向ける毛皮の女のかまえは見事にすきがなかった。
こうなればフィレーナも身構えるよりない。
「ギャッビー、かみ殺してもいいわよ……」
毛皮の女が傍らの犬にやさしく声をかけた。
やさしい口調だけにすごみがあった。
ギャッビーと呼ばれた犬はフィレーナに牙をむきだしてうなった。
犬のするどい視線が、フィレーナの目とぶつかりあう。
……こいつは闘技士の目だ……。それもかなり腕のたつ奴の目だ……
フィレーナは、とっさにそう思った。
犬の知識があまりないフィレーナには分かるはずもなかったが、その犬は、犬科の動物の中でほとんど絶滅したといわれる狼の血を四分の一持った狼犬だった。
犬は鼻をひくつかせた。
と、何を感じたのか、尾を振って、フィレーナに向かって一度、二度、吠え、その場に坐り込んだ。
毛皮の女があきれた顔でつぶやいた。
「えっ?……、そんなことって……」
女の剣から一瞬、動揺が見てとれた。
フィレーナはつっ込むなら今だと思った。

だが、毛皮の女の剣を叩き落とすかわりに、もう一度こういっただけだった。
「僕は女の人とは戦いたくないんだ」
毛皮の女は肩をすくめた。
「あなたこそ、よくいうわね。女のくせに……」
「えっ？」
フィレーナはポカンと口を開けて、リラと顔を見合わせた。
フィレーナが女であるという秘密……、それは、いままで自分から明かさぬ限り、誰も気がつかなかったはずだ。
もの心ついたときから男として育てられたフィレーナは、根っから男の考え方や態度を身につけ、しかも、さらに注意深く男になりきろうと演技している今は、それこそ裸身でも見られない限り、女だと感づかれるはずはなかった。
この世でその秘密を知っているのはリラだけのはずだった。
……それがいとも簡単に見破られようとは……
フィレーナとリラの動揺を見透かすように毛皮の女がいった。
「やっぱり、女の人だったのね」
きつねにつままれたような顔で、フィレーナは呟いた。
「なぜ、なぜ、それが分かったんだ？」
女は、傍らの犬の頭を撫でた。

「ギャッビーが教えてくれたの」
「わたしの用心棒……この子は、どんな犬にだって負けやしないわ。この子に喉(のど)を食いちぎられた男たちは百人を下らないもの」
「ギャッビー？」
フィレーナは、女の傍らにおとなしく坐っている犬を見つめた。
確かに子牛のように大きいが、先刻の視線がうそのように温和な目をしている。今の様子なら、この犬がそんな猛犬だといわれてもとても信じられなかった。
だが、能ある闘技士は刃(やいば)をかくす……ということわざもある。
動物だって同じかもしれない。
フィレーナは女にいった。
「忠告ありがとう。喉を噛(か)まれた百人の男の一人になる気はないさ……。もっとも、動物と戦ったことなんてないからどうなるか分からないけれどね……」
闘技士の言い伝えによると、大昔は猛獣と戦う闘技試合(バトルショー)もあったという。
しかし、フィレーナの生きている時代ともなると猛獣は減少の一途をたどり、一部の好事家(こうずか)か、学術用の施設にわずかに飼われるだけになってしまっていた。
とにかく、猛獣は観賞用としても貴重で、金満家の間で取り引きされる値段も、莫大(ばくだい)な額だった。
なにしろ、最も一般的で値段が安い猛獣といわれる、たてがみ(メイン)を持ち、体に縦縞(たてじま)の紋様(もんよう)を持

つ獅子虎（ライガー）ですら、並みの奴隷（どれい）十万人分の値段なのだ。

とても闘技試合（バトルショー）に使ってひきあう額ではない。

まして、一回の試合で死なれでもしたら大損害である。

結局、この百年ほど、猛獣対猛獣……猛獣対人間の試合は行われなかった。

やはり闘技試合（バトルショー）は、この世界で一番命の値段の安い猛獣人間……闘技士（バトラー）という名の奴隷の人間対人間の殺し合いが、経済的でかつスリリングで面白く、帝国人民の好みにも合っていた。

それに、もっと派手な殺し合いを見たければ、異民族を征服するか、もしくは整理し抹殺（まっさつ）するという名目で、実用的で利益も多い、侵略戦争を行う方法を帝国人民は知っていた。

だからフィレーナは、練習でも試合でも動物相手に戦ったことはなかった。

だいいち、闘技士養成場（バトラーファーム）からめったに外に出なかったフィレーナが、帝国百科事典（デロスペディア）のさし絵以外で実物を見た動物といったら、闘技士の滋養用に蜜（みつ）を取る蜂（はち）か、残飯にたかるゴキブリとネズミぐらいしかいなかった。

帝国百科事典（デロスペディア）によれば、犬は飼い主に忠実だという。

だとしたら、毛皮の女のいいつけどおり、いつフィレーナに飛びかかってくるか分からない。

フィレーナは、リラをかばいながら硝子（クリスタル）ナイフを犬に向けてかまえた。

毛皮の女はクスリと笑った。

「ビビらなくても大丈夫。ギャッビーは、あなたたちを襲いはしないわ」

フィレーナとリラはわけが分からず、顔を見合わせた。

「ギャッビーは、オスなの。それも、とっても紳士な男の子なの……。相手がオスなら、誰にも負けないけれど、メスにはやさしいわ……。メスだったらたとえそれが人間でもね……。相手がメスなら、たとえ嚙まれたって、なにもしやしないわ。そのメスをくどきはするでしょうけれどね」

リラはあきれた顔で犬を見た。

「はあ……見上げたもんなんだ。人間の男の子にも見習ってほしいものだわ。けれど、どうしてフィレーナが女だと分かるわけ？　このワンちゃんに……」

リラは、フィレーナと毛皮の女が刃物を抜いて向かいあっているのもかまわず、屈託なく聞いた。

どうやらリラは、毛皮の女を、フィレーナが近くにいる以上たいした敵だとは思っていないらしい。

……それにしたって、今の台詞はないよな……

フィレーナは天を仰いだ。

リラの口ぶりでは、フィレーナが女であることをほとんど認めてしまったことになる。

毛皮の女は、フィレーナを頭の先から足の先まで見つめ、

「ふーん、何の趣味かは知らないけれど、見事に男の子よね。でもどんなに化けても駄目……、ギャッビーの鼻は騙せないわ。犬は目に見えないものをかぎわける力があるもの……」

……目に見えないものをかぎわける……

フィレーナはそれを否定しなかった。
事実、フィレーナの目が見えなかったとき、耳と鼻と肌に感じる気配の感覚がとぎすまされ、目が見える以上に戦うことができたのだ。
毛皮の女は続けた。
「あなたたちは女……。どんなにあなたが男ぶっても女は女……、男とは違う生き物ですもの、女なら、ギャッピーが攻撃しなくても不思議はないわ……」
毛皮の女は、剣を腰のベルトに収めながらいった。
「どうやら、帝国軍の間諜(スパイ)でもなさそうね」
「僕が、帝国軍の間諜(スパイ)？」
「帝国人民でないことは分かっていたわ。でも、異民族や帝国の属国人の中には、流民狩り(ウオンダーナハント)の賞金をかせごうとする間諜(スパイ)も少なくないもの……」
「流民狩り(ウオンダーナハント)？……」
フィレーナは聞きかえした。そんな言葉は聞いたことがなかった。
「じゃあ、あなたは流民(ウオンダーナ)ってわけ？」
リラが口をはさんだ。
「リラは知っているのかい？」
リラはコクリと頷(うなず)いた。
「帝国の男の人たちを相手にする仕事の私には、知識と教養も必要だもん……ウン……」

リラは、ちょっとだけ胸を張った。

「流民(ウォンダーナ)ってのはね。帝国に滅(ほろ)ぼされた異民族の中で、殺されたり奴隷(クレチア)にされずに逃げだした人たちのことなの……。小さな集まりを作って帝国の人目につかないところを、あっちこっち流れ歩いているらしいの……。でも、流民狩り(ウォンダーナハント)のおかげで、最近はほとんどいなくなったって聞いてた。でも……、いるところにはいるのよねえ……」

リラはいまさらながらに毛皮の女をまじまじと見た。

「ちょっと待って！」

毛皮の女もリラをまじまじと見かえして、

「あなた、今、帝国の男を相手にするっていったわね。するとあなたは、快楽用奴隷(プレジャークレチア)なの？」

「快楽用奴隷(プレジャークレチア)!?」

リラは、ぷーっとふくれた。

「失礼ね、接待用奴隷(エンタテインメントクレチア)と呼んでほしいわ。なによ、あなたなんて奴隷(クレチア)にもなれずに逃げまわっている流民(ウォンダーナ)じゃない」

「流民(ウォンダーナ)には、誇り(プライド)があるわ」

「奴隷(クレチア)にだって誇り(プライド)は……」

そこまでいって、リラは詰まった。

「……ないから、これから作るわよっ！」

リラは口をとんがらかした。

「よせよ」
フィレーナはリラの肩を叩いた。
「似たもの同士、悪口をいい合っても仕方ないじゃないか……」
「そりゃまあ、目くそ、鼻くそを笑うってなもんだけど……。あっ、私たちが目くそですからね。断わっておきますけど……、うん、鼻くそじゃないんだからね、絶対」
毛皮の女はくすくすと笑い出した。
先刻までの警戒と敵意は消えていた。
しかし、すぐに真顔になり、
「でも、奴隷（クレチア）がどうしてこんなところに……しかも男の格好なんかして……まさか……」
フィレーナは毛皮の女が思いついたことに察しがついた。
フィレーナは肩をすくめていった。
「そう、僕らは脱走したんだ。ドラの街から……」
「ドラの街……!」
毛皮の女は息を飲んだ。
「ドラの街からここまで、どれくらいの距離があると思っているの?」
逃亡奴隷（エスケープクレチア）が、ドラからこの浜辺まで無事に逃げてこれるなど、毛皮の女にとって、奇跡以外のなにものでもなかった。
「ああ……、かなりの距離だよね……」

フィレーナは、かみしめるようにいった。
「いろんなことがあった……。いろんな人が、僕らのせいで……」
……死んだ……
だが、その言葉は声にならなかった。
「そう……」
毛皮の女が頷いた。
フィレーナの声にならない言葉が分かる気がしたのだ。
……流民にだって、ここまで生きのびている間には、さまざまなことがあり、さまざまな人が消えていった……
「よかった……。殺さなくて……、あなたを」
毛皮の女が呟いた。
「えっ？」
「先刻ね……、あなた、海の上に材木のように浮かんでいるんですもの。弓矢を命中させないほうが難しいぐらいだったわ」
「じゃあ、わざとはずしたのかい？」
「ええ、あなたが帝国人民ではないのは分かっていたけれど、素性が分からないし、わたしたちの居場所が帝国に知られても困るし……、いつもなら殺していたかもしれない……。でも、今は、なんとなく人を殺したくなかった……」

リラが目を丸くして口をはさんだ。

「じゃ、フィレーナは、なんとなく助かったわけ？」

「素性を知ってから殺してもいいと思ったの……。それでよかったんだわ……。鼻くそが目くそを殺したら、共食いでしょ……？」

「そりゃまあ……そうだけど……。でもね、なぜフィレーナが帝国人民（エンパイアラー）じゃないと分かったの？　女と男の差ほど、奴隷（クレチア）と帝国人民（エンパイアラー）の体に差があるとは思えないけど……」

それはフィレーナも聞きたいことだった。

リラは、犬の顔をのぞき込んだ。

「ねえ、ワンちゃん。やっぱりあなたは、それ……、お見通しだったわけ？」

「いくらギャッピーでも、それは無理だわ」

毛皮の女が苦笑しながらいった。

「じゃあ、どうして？」

「海に入っていたから……」

「海に？……どうして海に入っていたら、帝国人民じゃないと分かるの？」

毛皮の女は、意外そうにフィレーナを見つめた。

「知らないの？　帝国人民が海に近よらないことを……」

「海に近よらない？」

フィレーナとリラは顔を見合わせた。

もの心ついてからというもの、内陸部のドラの街の付近から出たことのない二人は、海という言葉すら、知ったのは最近だった。

フィレーナの読んだ帝国百科事典(デロスペディア)にも、海の記載はなかった。

まして、帝国人民が海に近づかないなど、知るはずもなかった。

「どうして近よらないの？」

フィレーナがいうより先に、口の早いリラが聞いた。

「本当に知らないのね」

あきれ果てたという感じで、毛皮の女はかぶりを振った。

「で、あなた、体は大丈夫？　あんなに海につかっていて……」

毛皮の女はフィレーナの顔をのぞき込んだ。

「体はだるくない？　目はかすまない？　吐き気はしない？　せめて体がかゆいとか……、本当になんともないの？」

フィレーナは聞かれた意味が理解できず、キョトンとした。

「別に、なんともないけど……。なぜなの？」

毛皮の女は頷いて微笑した。

「やっぱり、あなたは帝国人民の血を引いていないわ。帝国人民だったら、ただじゃすまないもの……」

「どういうこと？」

「帝国人民(エンパイアラー)は、海の毒に弱いの……。弱いどころか、海の水は命取りになりかねないわ」
「海の毒？」
フィレーナはわけが分からず聞きかえした。
「ええ、海は毒の溜(た)まり場(ば)……。帝国人民じゃない私たちだって長く海の水につかっていると危険だわ」
「そんな馬鹿な……。海はあんなに青く澄みきっているじゃないか……。それが、毒だなんて……」
「いくらきれいに見えたって目に見えない毒がまじっているはずよ……。もっとも、こんなに海が澄んでいる日はめったにないけれども……」
そのときだった。
横たわっていた犬がむっくりと起きあがった。
鼻をひくつかせ、一声大きく吠えた。
毛皮の女は、犬の頭を撫でた。
「分かったわ、ギャッピー。やっぱり青い海は長続きしないわね」
そしてフィレーナとリラにいった。
「さあ、早く波打ち際から離れましょう」
「どうして？」
フィレーナもリラも、もっと海を見ていたかった。

「あの臭いが分からないの？」
「臭い？」
フィレーナは息を吸い込んだ。
潮の香りが鼻をくすぐった。
しかし、すぐに香りの異変に気がついた。
「あっ！」
フィレーナは小さな叫び声をあげた。
潮の香りにまじって、発酵しすぎの乳酸食のような饐えた臭いがする。
臭いはみるみる強くなり、心地よい潮の香りを食いつぶしていく。
「これは！」
フィレーナは呆然と立ちすくんだ。
「来たわ」
毛皮の女は、水平線を指さした。
空と海との境が、くっきりと赤茶色の線で区別されて見えた。
赤茶色の線はどんどん幅広くなり、海を染めていく。
いままで切れ味良く見えていた遠くの白い波浪が、まるでゼラチンを流したようにどんよりとした動きになったかと思うと、もうそこに波はなく、ぼこぼこと臭気を吐き出す赤い泥水に変わっている。

まるで青い床に丸めたじゅうたんを転がして広げたかのように、赤茶色の海水が青い海を侵略してくる。

臭気はますます強くなり、肌にしみついてしまいそうだ。

「なにこれ！　たまんない！」

リラは思わず鼻をつまんで目をしばたたかせた。

目から涙が出て来る。

臭気が目を刺激するのだ。

「汚潮（ダーティタイド）……。いつもはこれが普通なの……。風の向きや潮の流れで、海が青く澄むときもあるけれど、めったにないわ……。さあ行きましょう。ここにいると海水にふれなくても、腐った空気で目や肌をやられてしまうわ」

「こんなことって……」

フィレーナは立ちすくんでいた。

目から涙がとめどなく流れた。

それは刺激臭のためだけではなかった。

……これが海？　これが普通の海？……うそだ……、僕の海はこんなんじゃない……。フィロセラの海は、こうじゃない……

赤茶色の汚潮は海を食いつぶし、浜におしよせた。

フィレーナは叫んだ。

「よせ！　僕の海を！　やめてくれ、僕の世界を！」

赤茶色の海は何も答えず、ただぶつぶつと臭気を吐き出し、ひとり言をいっているようだった。

空は青い。

だが、海は夕暮れのように赤い。

しかも、それは、汚れ腐った赤さだ。

これが落日を映している海だとしたら、まるで断末魔の太陽を映しているとさえ思える色だった。

「畜生！　やめろ！　やめるんだッ！」

フィレーナは、波打ち際を駆け、吐くように叫び続けた。

臭気にむせる。

のどが痛い。

フィレーナは、それでも臭気を払うように手を振りまわして、わめき続けた。

リラもまた臭気で流れでる涙とは別の涙で、フィレーナを見つめていた。

フィレーナの悲しい気持ちが、よく分かるのだ。

……せっかく会えた海なのに……。あれほど苦労して辿りついた海なのに……

そのとき、呆然とフィレーナの様子を見つめていた毛皮の女が、我に返ってリラの肩に手を置いた。

「なぜ、海にあんなにこだわるのか知らないけれど、このままではいくら帝国人民じゃなくても体がやられてしまうわ……」
リラはこくりと頷くと、フィレーナの傍らへ駆けていった。
「ねえ、浜から離れようよ……。体に悪いよ」
フィレーナは、まるで子供が駄々を捏ねるように体をふるわせた。
リラは涙をポロポロ流しながら、それでも笑顔だけはしっかり作っていた。
「じゃあ、わたしもここにいる。わたしの肌が荒れたり体調が悪くなったりしたら、フィレーナのせいですからね」
フィレーナはリラを見つめてぼそりといった。
「リラは行けよ」
「いいえ、フィレーナのいるところが、わたしのいるところだもん。いい男が見つかるまではね……。でも、このままじゃ肌がただれちゃってさ、もらい手がなくなっちゃって、一生、フィレーナにまとわりついちゃうことになるかもね……。そうなったら、どうするの？」
フィレーナの涙でぐちゃぐちゃの顔に、微笑が浮かんだ。
「困る……」
「でしょ？　だから撤退、撤退……。だいいち、海はフィレーナの敵なんかじゃないでしょ。それに近づいて自分の体がやられちゃうんじゃ、馬鹿みたいじゃん」
「ああ……そうだよね……。こんなになっていたって、海は敵じゃない」

「そう……それに、フィレーナだって犬に見破られる程度は女なんですもの。女は、お肌を大事にしなきゃ……。まだ二十歳（はたち）前なのよ。私たち……手入れの必要のない年なのに、しみやそばかすやしわができちゃ、たまんないわよ」

突然、違うテーマが顔を出すのが、リラらしかった。

フィレーナは肩をすくめた。

いくらか汚潮（ダーティタイド）への絶望的な怒りが収まっていた。

「分かったよ。早く海から離れよう」

「うん、よろしい」

リラはこくりと頷くと、フィレーナの手を取り、走り出した。

次第に二人の走りは速くなり、すぐに全力で走っていた。

二人は歯を食いしばり……、涙がほおを伝わった。

涙は後ろに散り、陽の光にキラキラと輝いた。

それは、赤茶色の海が失った輝きだった。

第2章
放浪の民

浜からそう遠くない草原を三人は歩いていた。

汚 潮（ダーティタイド）の臭いは、ここまで漂っている。

「わたし、アマネラ……、二十歳まであと一カ月なの」

毛皮の女は自分の名を告げた。

「へえ、もうすぐおばさんなんだ。わたし、リラ。まだ二十歳までは四年ある女盛りの十六歳ですよ」

リラにとって大人に見える女性はみんなおばさんなのだ。

アマネラは、子供を見るような顔でリラを見て、

「女盛りね……。女はね、子供を生んで初めて女と呼べるのよ。だから、私もあなたも、まだまだ女の子……」

「子供なんか、生む気になれば、いつだって生めると思うわ……。過激かな？」

リラはペロリと舌を出した。

「にわとりが卵を生むんじゃないんですからね。生んでからいってね……」

アマネラはリラにさとすようにいった。
「けっこう大変だと思うわ。女が人を生むって……、あたりまえのことだけど……」
アマネラは、汚潮を見た衝撃からか、黙り込んで歩いているフィレーナに目をやった。
「そこの無口な男の子は、どんな女の子なのかな？」
「ん？」
フィレーナは我に返って答えた。
「フィレーナ……、多分、十六か十七……、闘技士(バトラー)の記録だと十七歳になったはずだけど、生まれた月日なんて、ほんとはどうだか分かりゃしない」
「フィレーナ……海の魂(たましい)って意味ね」
アマネラが呟(つぶや)いた。
フィレーナは立ち止まった。アマネラが、フィレーナの意味を知っているのが意外だった。
「どうしてそれを……」
「わたしたちは流民(ウォンダーナ)ですもの、この大陸のいたるところをさまよい歩いたわ。それで、分かったんだけれど、海が近い土地にはフィレーナという名の人が多いの……、女も男もね。フィレーナって名前は、女と男の違いとは関係なくつけることのできる名前のようね……。だからって、あなたが男の格好(かっこう)をしている説明にはならないけど……」
「フィレーナって、そんなに多い名なんですか？」
これもまた、闘技士養成所(バトラーファーム)育ちのフィレーナが、教えられていないことだった。

「そうみたいね。子供のころ、私の部族の長老に聞いたことがあるの……。この世界には、天が与えてくれたいろいろな恵みで、それぞれいろいろな生き方をしている人たちがいて……、例えば、海の恵みで暮らしている人たちは海の心、フィファラとか海の魂、フィレーナとか、フィって言葉のつく名が多いんですって……。私だって、アマネラのアマは草原を意味する言葉で、草原の魂ということらしいの……。多いのよ、アマネラって名前も……。川で生きる人たちは川の魂、ハヤーカ、土を耕やす人たちは土の魂……、ノルーシャ、山で暮らす人たちには山の魂……」

フィレーナは思わず呟いた。

「ラリス……」

……そう、ラリス……。フィレーナを救い、山の国リトル・ラリテニアとともに白熱光のむこうに消えていった男の名前……

「知っているの？　ラリスって名前を……」

アマネラが聞いた。

「ああ……」

フィレーナは、ぽつりと答えた。

「そう……、そうよね。ラリスって名前も、山ではありふれた名前ですものね。あっても不思議はないわ」

「ありふれてなんかいない。僕にとっては……」

フィレーナはそれ以上、言葉にならなかった。

フィレーナにとって、ラリスという名は、たった一人の男の名だった。

もしかしたら、男として育てられたフィレーナが生まれて初めて女として見つめた男だったのかもしれなかった。

「ねえ、わたしの名前はどういう意味なのかしら……。わたし、何の魂かな……」

フィレーナの気持ちを素早く察したリラが、明るく自分に話題を向けた。

「リラ……、リラね」

「うん……。わくわくどきどき……、で聞きたいのです」

「リラって、お芝居（しばい）や踊りや歌に関係があるんだと思うわ……。昔、いろいろな国を芸能（エンタテインメント）を見せて回る民族がいたんですって……。どさ回り民族（リピーポー）っていうらしいんだけれど……」

幸いなことにリラは、どさ回りの意味を知らなかった。

リラは上機嫌（きげん）で、

「うん、芸能（エンタテインメント）か……。格好よくいえば、芸術（アート）よね。わたしは芸術（アート）の魂か……」

「魂って意味じゃないらしいわ……。リラのラというのはどさ回り民族（リピポー）の言葉で、女の子役のことらしいの……」

「子役？……」

リラは、眉（まゆ）をくもらせた。

アマネラはなぐさめるようにいった。

「ですから、きっと、歌って踊れるかわいい小さな女の子って意味だと思うわ」

アマネラは、かわいいのところを強調していった。

リラは口をとんがらかした。

「かわいいのはいいわよ。だって、わたし、本来かわいいんだもん。でも、小さいってのはなによ。わたし、二十歳になっても三十歳になって本物オバンになっても、四十歳以上になって妖怪オバンになっても、ちっちゃな女の子って呼ばれるわけ？　そんなのあり？」

リラは、死んだラリスを思うフィレーナの気持ちをまぎらわそうと、いささか大袈裟（おおげさ）にわめいてみせた。

アマネラがあきれながら、リラをなだめた。

「いつまでたっても名前だけは年を取らないって、悪いことじゃないわ」

「悪いのです。五十歳のオバアチャンが、十六歳ですなんていったら、カマトト・ブリッコ・サバヨミじゃすまないわよ。場内大爆笑よ、よし、もう、奴隷（クレチア）は止めたことだし、二十歳（はたち）すぎたら改名じゃ……。うん、そうだ、芸術の魂で行こう。リラのリにフィレーナのレーナ……、リレーナ……、けっこう、わたしの柄じゃなあい？」

「名前を変えることはないよ」

フィレーナがリラを見つめていった。

「どんなにありふれた名だって、僕はフィレーナだ。僕は僕一人だ。リラだってどんなに年をとったってリラなんだ。リラが十人いたって、僕のリラは一人だ。けっして、間違えたり馬鹿

にしたりしないよ」

　フィレーナは思う。

……フィレーナという名が百人いようが千人いようが、僕は僕としてフィレーナでいつづけよう……。そう、僕にはフィレーナとしてやらなければならないことがある……。帝国に滅ぼされた故郷、海の国フィロセラをよみがえらせるんだ……

　フィレーナは、アマネラに向き直って聞いた。

「アマネラさん。帝国の首都、ボーに行くには、どう行ったらいいんだろう」

　アマネラは、目を丸くした。

「ボーへ？　逃亡奴隷が、帝国のお膝元へ行くの？　むちゃだわ！」

「むちゃは、今までもやりすぎるぐらいやってきたよ」

　リラも頷いた。

「むちゃがむちゃくちゃ、しちゃくちゃになってもやるっきゃないの……、うん！」

「どうして？」

「会わなきゃならない人がいる」

　それはフィレーナを育てたゼナの遺言だった。

　――お前がフィロセラの後継者を望むなら、デビス帝国の首都ボーの剣鍛冶、ウトを訪ねよ――

「ボーに、逃亡奴隷に会いたがる人がいるっていうの？」

アマネラは、あきれかえった顔だ。
フィレーナはそれには答えず——、
「これ以上いうと、アマネラさんに迷惑がかかる」
アマネラは、ふっと笑った。
「いいわ、聞かないわ。海辺でのあなたを見ていると、何か事情があるんでしょうね……。私たちも、帝国に追われている身は同じだわ。帝国に捕まって、命乞いのために、あなたたちのことを漏らすかもしれない……。何も知らないほうがいいのかもしれない」
「ありがとう……、聞かないでくれて……」
「けれどね」
アマネラは、改めて真顔でフィレーナを見た。
「このあたりは、私たちを狙う流民狩りがうようよいるわ。そんな中を男の子と女の子が二人だけでうろうろしていたら、人はどう思うかしら……。だいいち、食べ物はあるの？　着換えはあるの？」
「なんとか調達するよ」
「甘いわ……。ボーは、帝国の中心なのよ。ドラのような田舎都市とは違うの。ボーに近づけば近づくほど、警戒は厳重になるし、食料の管理も通行の管理も見落としが少なくなるわ。帝国人民の残飯荒らしなんかしてごらんなさい。たちまち流民狩りの餌食になるのがおちだわ」
「でも、行かなきゃならない」

アマネラは肩をすくめた。

「行くなとはいっていないわ……。でも、今は止めたほうがいい……。せめて夏を待ちなさい。夏になれば、休暇（きゅうか）でボーの首都市民（メガロシチズン）と地方都市市民（ローカルシチズン）の往来が激しくなるわ。そうなれば、万が一、首都にまぎれ込めるかもしれない。それに、あなたたちは女でしょ……。あの人たちが通りかかってくれたら、なんとかなるかもしれないわ」

「あの人たち？……」

リラが聞いた。

「帝国の病気持ち……、わけの分かんない女たちがいるの」

「神女団（ミメズ）のことですね」

フィレーナがいった。

「知っていたのね……」

「知っているもいないも、わたしたち、神女団（ミメズ）に化けてドラの街を抜け出したんだもん」

リラの言葉の終わらぬうちに、フィレーナが身を乗りだした。

「このあたりにも、神女団（ミメズ）がいるんですか？」

ドラを抜け出した手が、もう一度使えるかもしれないと思ったのだ。

「暖かくなってくると、ああいう人たちが増えてくるものよ……。でも、このあたりは、よっぽど運が良くないとねえ」

「どうして？」

「海が近いでしょ。帝国人民（エンパイアラー）は私たちよりずっと海の毒に弱いの。だから、来る人も少ないわけ……。私たちが海の近くを流民（ウオンダナ）しているのも、帝国人民（エンパイアラー）から見つかりにくいからなの。いずれにしたって、ボーに行くのは、ここで夏まで待ったほうがいいわ」

「ここで？」

リラは、情なさそうにあたりを見回した。

雑草だけの草原が広がっている。

遠くに森も見えるが、まだ春になりきらない季節だ。

森に行っても、木の実や果物があるとは思えない。

リラのお腹が、思わず、グーッと鳴った。

「夏まで待ったら、私ことリラは小さな女の子じゃすまないわ。針金の人形みたいになっちゃう」

フィレーナも頷いた。

「やっぱり、今、行くしかないね」

「待って……。夏までいなさい」

アマネラが二人を交互に見て、やさしくいった。

「私たちも追われているといったでしょう……。もしも、あなたたちが流民狩り（ハンター）に捕まったら、私たちも危くなるわ」

「僕らは、喋（しゃべ）りはしないよ」

「喋るわ……。あいつらは自白剤（コンフェスピル）を持っているもの……。薬には勝てないわ」
「だったら、舌嚙（か）んじゃう……。どうせ、わたしたち逃亡奴隷（エスケープクレチア）だもん。生きちゃいられないもん。死刑に決まってるもん」
リラがあっけらかんといった。
アマネラはかぶりを振った。
「なにも死ぬことはないわ。せっかく今まで生きてきたんですもの……。夏になるまで、私たちと一緒（いっしょ）にいればいいわ……。男の格好してたって、男の子ほど大食いじゃなさそうだし、リラちゃんは小さい女の子だしね……」
「でも、迷惑はかけられないわ」
リラはいささかムッとして、フィレーナのいうつもりだった台詞（せりふ）を先回りした。
「このあたりをうろつきまわられるほうが迷惑なの」
アマネラがきっぱりといった。

*

夕暮れが近く、紅（あか）い太陽が赤茶色の海を照らして、海の色をさらにどす赤く、まるでかたまりかけた血だまりのような色に変えていく。
血の海――、いや血の膿（うみ）と表現したほうが適当かもしれなかった。
そんな海を遠くに見通せる草原に、木の枝を組んで、毛皮を張り合わせただけの天幕（テント）のよう

な住居が十数軒立っている。

それがアマネラたちの移動集落だった。

住居の近くで、数頭の馬や牛がのんびりと草を食べている。

フィレーナとリラを集落に案内する道すがら、アマネラは自分たちの民、アマクネ族の話をした。

「わたしたちアマクネ族は、帝国ができる前は、牛や馬や羊を連れて、この大陸の草原を駆け回る民族だったの。アマクネの民は、どこの国にもどこの宗教にも属さない民族だったそうよ。信じているのは、草を育てる雨と風と太陽……、そして毎年絶えず生まれてきて、けっして減ることのない牛や馬や羊たち……、草原がある限り、誰(だれ)にも指図(さしず)されず、誰にも指図しない、自分たちだけで生きていける民だったわ。わたしたちには草原がある限り、国境なんて必要なかった。わたしたちは、他の民に何も望まなかったし、他の民もわたしたちから牛乳や羊毛や肉を買って満足していたわ。アマクネ族は、そうやっていつまでも草原と一緒に生き続けるはずだった……。でも……」

フィレーナは頷いた。

「帝国がやってきたんだね」

「ええ、帝国は草原のある国を次々と征服して、草原を工業地帯に変えていったわ。そして燃料(エネルギー)の廃棄物(はいきぶつ)をたれ流しにしたの。草原は雑草さえ生えず、砂漠に変わっていった……。わたしたちは行き場がなくなってきたの……。帝国は、服従するなら北の凍土(ツンドラ)のわずかな土地を

与えるといってきたわ。アマクネの民は断ったわ。わたしたちは、自由に草原を駆け回ってこそアマクネの民なんだってね……。そして勝ち目のない戦いが始まった……。そして、他の国と同じように負けた……」

「そして、滅ぼされて、みんな奴隷(クレチア)にされちゃった……。アマネラさんちもよくある話の事情なわけよね……」

リラが溜(た)め息(いき)をついた。

「いいえ、わたしたちは滅ぼされてはいないわ」

「滅ぼされていない？」

フィレーナが聞き返した。

「わたしたちは、もともと国なんて持っていない民ですもの。親族単位の小さな部族がいっぱいあって、それぞれ別々に馬や牛を遊牧しているの……。戦いのときだけは団結するけれど、あとは気ままに草原を駆け回っているわ。帝国は、わたしたちを根こそぎにしようとしたけれど、みんなくもの子を散らすようにちりぢりになって逃げだしたの……。いくら帝国でも、その全部を一つ一つつぶしていくことはできないわ……。なにしろ、わたしたちの家は天幕(テント)で、同じ場所に七日間もいやしない。草原のある限り、わたしたちは逃げ続けるわ。わたしたちの部族の全部が消されない限り、アマクネの民は滅ぼされたことにならない。たとえ流民(ウオンダーナ)と呼ばれても、国を失って逃亡(エスケープ)している他の人たちと同じ流民(ウオンダーナ)じゃない……。草原のある限り、わたしたちのいくところ、そこがアマクネなの……」

「でも、いったい、どのくらいアマクネの部族は残っているの？」
リラが聞いた。
「分からないわ。どの部族も、逃げ回るのが精いっぱいで、お互いに連絡を取り合う余裕なんてないもの。もしかしたら、わたしのところだけしか生き残っていないなんてことも……。その可能性もあるわ。だって、最近、他の部族のうわさをほとんど聞かないものね……。でもね、わたしのところが生き残っている限り、アマクネは滅びてはいないわ。たった一つでもね」
リラも肩をすくめて微笑み返した。
「わたし、大丈夫だと思う。一つが残っていれば、広い大陸ですもの、他にも残っている可能性、強いもんね」
「ええ、この大陸の海岸線は広いわ。帝国人民が海に近づきたがらない限り……、生きているわよね。他のアマクネの人たちも……」
アマネラは、同意を求めるようにフィレーナを見つめた。
「あ、ああ、きっと、いっぱい生き残っていると思うよ」
「少なくとも、わたしたちの部族は生き残り続けるわ……。絶対にね」
アマクネはきっぱりといった。
……国がなくても、民族は成り立つ……。そういう考え方もあるのか……
……国としてのアマクネでなく、草原で生きるという意味で、存在しているというアマクネ……

フィレーナにとって、それはいままで思ったことのない考えだった。

……僕はフィロセラという国にこだわりすぎていたのかもしれない。海に生きる国フィロセラ……。いや、国はなくとも、海で生きる限り、そこにフィロセラはある……。

フィレーナは、ふっと溜め息をついた。

……でも、あの赤茶色のどろどろした水のひろがりが海と呼べるのだろうか……。

……フィロセラがあったころの海が、今は、どこにあるというのだろう……。

もし、万が一、フィロセラの後継者として、フィレーナがフィロセラという国を復興できたとしても、そのとき本当の海がなければ、その国は本当のフィロセラと呼べるのだろうか……。

草原のある限りアマクネの民は滅びない……。

そういいきれるアマネラを、フィレーナはまぶしかった。

そのときだった。

アマネラの傍らにぴったりくっついていた犬、ギャッピーが足を止めた。

そして、うなり声をあげた。

「どうしたの、ギャッピー」

ギャッピーは低く身構えると、そろり、そろりと、前方の岩場に近づいていく。

アマネラは、弓矢をかまえた。

「な、なんなの？」

リラがフィレーナにささやいた。

フィレーナは、すでにナイフを抜き、くちびるに指をやり、リラに静かにしろと合図した。

アマネラとフィレーナは身をかがめると、ギャッビーの後をついていった。

岩場にキラリと光るものが見えた。

槍(やり)の先の硝子(クリスタル)だ。

アマネラとフィレーナは頷き合うと、二手に別れて、右と左から岩場に向かった。

そこには、武器を持った十数人の男たちがいた。

一人は双眼鏡(ツァイスコープ)で岩場の向こうをうかがっている。

そこには、アマネラの部族の住む天幕(テント)が見えた。

双眼鏡(ツァイスコープ)を持った男が、傍らの男に言った。

「どうする？　帝国の流民処理局(ウォンダーナオフィス)に知らせるか？……それとも、今やるか？」

「不意討ちすりゃ、勝てねえ数じゃねえ……」

「かなり殺さなきゃなんねえぞ……。奴隷(どれい)に売っ払う数が少なくなっちまう。殺しちまっちゃ死体は半額にしかなんねえ」

「けど、流民処理局(ウォンダーナオフィス)に知らせている間に、移動でもされちゃ、元も子もねえぜ。最近は流民(ウォンダーナ)も少なくなってきた。捕れるときに捕らなきゃ、他の流民狩り(ウォンダーナハンター)どもに先を越されかねねえご時世だ」

いうまでもなく、流民狩り(ウォンダーナハンター)の一団だった。

帝国に敵対せず、戦わずして帝国の属国になった国々は、軍備の縮小を命ぜられた。

職を失った兵士たちの中には、流民狩り（ウォンダーナハンター）になる者も多かった。
帝国にとっても、人種の違う彼らは、汚潮（ダーティタイド）の海に近づいても、帝国人民ほど海の毒を苦にせず、流民狩りにはもってこいだった。
双眼鏡の男が、男たちにいった。
「野郎ども、狩りを始めるぜ。じじいやばばあは殺しちまえ。女や子供は高く売れる。身重な女は一・五倍だ。流民狩り参加料（ハンターチャージ）は十パーセント、武器使用料は五パーセントの天引きだ……。いいな」
男たちの一人が呟いた。
「不景気なご時世だ、仕方あんめえ」
「よーし、行くぜ！」
双眼鏡の男は、攻撃の合図をしようと手を振り上げた。
そのときだった。
ヒュッ！
風を切って男の首筋の動脈に矢がつきささった。
矢にはひもがついていた。
次の瞬間、矢はひもに引かれ首筋から離れ、飛んできた方向に戻っていった。
男は首筋から、すさまじい勢いで血を吹き出させ、倒れた。
悲鳴も出なかった。

おそらく、本人も、いったい何が起こったのか分からなかったのだろう。
倒れてから首筋に手をやり、血にまみれた手の平をカッと見開いた目で見つめてから、身をよじらせてわめき散らし、体を痙攣させながら息絶えた。
男たちは呆然と立ちすくんでいる。
ヒュッ!
また、風の切る音がした。
「グェッ!」
もう一人が、首筋を押さえて倒れた。
男たちの間に戦慄が走った。
「誰だ! どこにいるんだ!」
男たちは、背中合わせに輪になった。
そのうちの一人が悲鳴をあげて倒れる。
男たちは、首筋にささった弓矢をやっと見定めた。
ひもがついた矢は、倒れた男の首筋から離れると、宙を飛んで岩場の陰に戻っていく。
「あそこだ!」
恐怖に錯乱した男が、剣をふり上げ、岩場の陰につっ込んでいく。
その顔面に矢がつきささる。
男は仁王立ちになった。

その顔面にもう矢はなく、チョロチョロと血が流れ出ている。
男は、立ったままの格好で硬直し、そのまま後ろ向きに倒れた。
「あれが、弓矢のひもの使い道か……」
別の物陰で、様子をうかがっていたフィレーナが呟いた。
数分のうちに四人の流民狩りを倒したのは、アマネラの放った、たった一本の矢だった。
男たちの首筋の動脈を断ち切った矢は、ひもに引かれて再びアマネラの弓に戻り、瞬時に次に射る準備が終わっているのだ。
あらためてフィレーナは、アマネラの弓矢入れを見た。
今、弓につがえている矢の他はなかった。
アマネラは、一本の矢しか持っていないのだ。
……たいした自信だ、たった一本の矢で、これだけの数と戦うなんて……。それも女だっていうのに……。
フィレーナは自分もまた女であることを忘れて、闘技士として、アマネラの弓の腕にあきれた。
そのとき——、
「ワーッ！」
流民狩りたちが、大声をあげてちりぢりに走りだした。
このままかたまっていては、矢の餌食になるだけだと思ったのだろう。

それぞれが盾（たて）になる岩場を選び、その陰に駆け込んでいく。
しかし、岩場に駆け込む前に、五人の男の首筋がアマネラの矢で穴を開けられ、血を噴出（ふんしゅつ）させていた。
……僕が手伝わなくてもよさそうかな？……
いきなり、フィレーナの背後に、流民狩り（ハンター）が剣を振り上げて現れた。
フィレーナの倍以上ある大男だ。
岩場の陰づたいにやってきて、フィレーナの後ろ姿を見たのだ。
「くらえ！」
流民狩り（ハンター）は剣を振り降ろした。
だが、そのままの格好で動けなくなっていた。
振り向きざま、剣をかわしたフィレーナが、流民狩り（ハンター）のふところに飛びこむと、流民狩り（ハンター）のあごの下からナイフをつきつけていたのだ。
「動くと死ぬよ……」
流民狩りは声も出せず、震えている。
「剣を捨てて……」
流民狩り（ハンター）は、剣を持つ手を離した。
……剣を捨てさせたのはいいけれど、これからどうしようか……
フィレーナはとまどっていた。

普通なら、とっくに流民狩り（ハンター）ののどにナイフをつき上げて殺しているところだった。
闘技士（バトラー）のフィレーナなら当然のことだ。
体がそう憶（おぼ）え込まされているはずだった。
だが、今のフィレーナは違っていた。
なぜか、ナイフの動きにブレーキがかかってしまったのだ。
フィレーナのどこかで、人を殺したくないという意識が働いていた。
「このままここから消えれば、命は助けてやるよ」
とりあえずフィレーナはそういってみた。
流民狩り（ハンター）は、ごくりと生つばを飲むと頷いた。
……頷いたって信じやしないけれどね……。いまさら、武器を捨てたあんたを殺すわけにもいかないし……、といって、そのまま帰せば、アマネラたちの居場所を報告するだろうし……
フィレーナは困っていた。
……まいったな、こいつをどうすりゃいいんだ……
フィレーナは舌打ちして、それでもナイフを流民狩り（ハンター）のあごの下から降ろした。
その瞬間——。
流民狩り（ハンター）の平手が、フィレーナをつきとばした。
フィレーナの体はふっ飛び、岩場に叩（たた）きつけられた。
流民狩り（ハンター）は捨てた剣を握りしめ、フィレーナをにらみつけた。

「このガキ……！」

「やっぱり信用できないんだよね」

我に返ったフィレーナは、あわれむように流民狩り（ハンタ）を見た。

……これで仕切り直し……。殺す口実ができたわけだ……

そう思いつつも、フィレーナは空（むな）しかった。

流民狩りのかまえを見れば、負けるはずのない相手だとすぐ分かる。

……あんたが死ぬのは、あんたのせいだからね……

フィレーナは、この流民狩り（ハンター）を確実に殺すだろう自分自身に弁解していた。

流民狩り（ハンター）は剣を振りあげた。

フィレーナは、どこを刺せば相手が苦しまずに死ねるか、それだけを考えることにした。

そのときだった。

岩場の上から、茶褐色（ちゃかっしょく）の大きな毛玉のようなものが、流民狩り（ハンター）の首のあたりに飛びかかった。

アマネラの犬、ギャッピーだ。

ガリッ！

にぶい音がした。

首の骨が割れる音だった。

ジャリッ！

さらに肉のひき裂(さ)かれる音がした。
フィレーナは顔をしかめた。
……痛いだろうな……
流民狩り(ハンター)は、首の半分をギャッピーに食いちぎられ、ぐらぐらした首でくちびるをひくつかせながら、両ひざをついて倒れた。
ギャッピーは、何ごともなかったように倒れた流民狩りを一瞥(いちべつ)すると、アマネラのいたほうへ駆けていく。
全く無駄のない動きだった。
岩場には、のどを食いちぎられた流民狩り(ハンター)の屍体(したい)がいくつもころがっていた。
どれもこれも一撃でやられている。
のどや首の他に外傷がないのだ。
……そう、これが闘技(バトル)の専門家(プロ)のやり方だ。僕も闘技士のころは、こうだったのかもしれない……。獣(けもの)のやり口か……。だとしたら、殺しにとまどう僕は、獣に戻れない……
それが、逃亡奴隷(エスケープクレケア)のフィレーナがこれから先、生きのびていくのに、良い方向なのか、悪い方向なのか、よく分からなかった。
いさぎよく敵の命を奪えないとしたら、その分、こちらの命が危険にさらされることも確かなのだ。
フィレーナは、そんなことにとまどいながら闘技(バトル)の専門家(プロ)、犬のギャッピーの後を追って、

アマネラのいる岩場に向かった。

カシーン！

剣の交錯（こうさく）する音がいきなり聞こえた。

アマネラが流民狩り（ハンター）の一人と斬（き）り合っている。

ギャッピーは、いまにも流民狩り（ハンター）に飛びかかりそうな構えだ。

アマネラは、ギャッピーをチラリと見て叫んだ。

「待って！　ギャッピー。人の斬り合いに飛び込むとケガをするわ。ここは、わたしにまかせて……」

ギャッピーは一声、凄（すご）みのある声で吠（ほ）えると、その場に伏せをした。

それは、いつでも飛びかかれる体勢だった。

だが、アマネラと流民狩りの斬り合いを見るフィレーナは、いささかまかせておけない気持ちになっていた。

アマネラの構えには確かにすきがない。

しかし、それにしては、あまりに動きがのろかった。

まるで動くのがおっくうなようだった。

いくらアマネラの構えにすきがないとはいえ、相手は男だ。

力まかせの剣を相手にするときには、脚技（フットワーク）を使った動きが重要だ。

なのに、アマネラの足はまるで鎖（くさり）をひきずっているように重い。

流民狩りが大上段からふり降ろす剣を、身をよじらしてかろうじてよけている。
……このままではやられてしまう……
フィレーナがそう感じたとき、流民狩りもそれを信じたのだろう。
剣をふりまわし、強引に、そしてたて続けに剣を叩きつけてきた。
アマネラは、その一撃一撃を剣で受けるのが精いっぱいの様子だ。
ガシン！
鈍い金属音がした。
アマネラの剣が折れたのだ。
流民狩りはニヤリと笑うと、もう一度力まかせに剣を叩きつけた。
アマネラは、折れた剣の柄で受けた。
しかし、流民狩りの力までは止めることはできなかった。
アマネラは、流民狩りの剣の力に押し倒された。
流民狩りは、アマネラの脳天めがけ、剣をふり上げる。
アマネラは思わず目を閉じた。
「ギャッ！」
悲鳴が響いた。
だが、それは流民狩りの悲鳴だった。
アマネラの頭ギリギリの地面に、流民狩りの剣がつき立った。

流民狩りの手の平に、フィレーナの投げたナイフがつきささったのだ。
うめきながら血まみれの手からナイフを抜き取った流民狩りは、フィレーナをにらみつけた。
だが、その視界を、いきなり茶色いふわふわしたものが覆い隠した。
流民狩りは動物の毛の臭いを感じた。
だが、流民狩りの意識があったのはそこまでだった。
首筋をギャッビーに食いちぎられた流民狩りは、アマネラの横に材木のように転がった。
フィレーナは流民狩りに近より、完全にこと切れているのを見降ろすと、やるせなさそうに首を振った。
……僕の行くところ、いつも死体の山だ……
フィレーナはあたりを見回した。
十数人いた流民狩りは、誰も生きてはいないようだった。
アマネラが弓矢で最初に倒した数人の他は、ほとんど、ギャッビーが牙の一撃で倒したのだ。
ギャッビーは、何ごともなかったように、流民狩りの返り血を浴びたアマネラの顔をなめていた。
アマネラは、顔中、汗だらけで、荒い息をしている。
いかにも苦しそうだ。
「大丈夫？　やられたの？」
フィレーナは抱き起こした。

「いいえ、すこし動きすぎただけ……」
フィレーナは怪訝（けげん）そうに聞いた。
「動きすぎた？　あれでかい？」
「ええ、弓矢を撃つだけなら動かなくても済んだんだけど……」
「どこか体でも悪かったのかい？　アマネラさん、あんた闘技（バトル）の腕はあるくせに、動きがかったるいんで変だと思ったんだ」
アマネラは、汗まみれの顔で微笑した。
「ううん、どこも悪くない……。これで普通なの……。すこし休めば元に戻るわ」
アマネラの手の平が、なにげなく腹部をさすっている。
「アマネラさん、もしかしたら……」
いつの間にか、フィレーナの後ろに来たリラがのぞきこんでいた。
「分かる？」
アマネラは、リラに肩をすくめてみせた。
「やっぱり……。毛皮のぶかぶかした服を着ていたから分かんなかったけどさ」
「いやだわ。わたし、初めてですもの、毛皮を脱いでも、まだそんなに目立ちはしないわ」
フィレーナはわけが分からずリラを見た。
「わかんないでしょうね。男暮らしの女の子には……」
リラは軽くフィレーナの頭をつっついた。

「あん？」
フィレーナは、キョトンとしている。
「もう一人いるの……」
「えっ？」
フィレーナはあたりを見回した。
「ばかね、どこ見ているの？　アマネラさんの中にいるのよ」
「アマネラさんの中？」
フィレーナは、アマネラを抱いた手を、そっと離した。
「男の子か女の子か、まだ分からないけれどね」
リラは、アマネラに微笑みかけた。
「きっと男の子よ。だって、暴れているのが分かるもの」
アマネラは、両手をそっとお腹の上に置いた。
フィレーナは呆然として、それから、こわれものに近づいちゃいけないといった感じで、後ずさった。
「あ、あの……子供がいるの？」
「そう、わたしとフィレーナの夫婦じゃ、絶対作れないもの。でも、大好きな男が見つかれば、わたし、なんぼでも生んじゃうわ。素敵だな、アマネラさん」
「けど、僕は、あの、どうしたらいいんだろう」



女が子供を生むのは分かっている。
フィレーナだって、この人の子供なら生んで見たいと思った男もいた。
しかし、実際に妊娠した女性を見たのは初めてだった。
フィレーナは妙に落ちつかなくなって、生つばを飲み込んだ。
恋人に子供ができたと知らされた男の気持ちのように、とまどっていた。
リラは、くすっと笑った。
「なに、うろたえているのよ。あなただって、生めるのよ、フィレーナ二世を……」
「え、あ……、まあ……、そうかもね……」
フィレーナは、ほおが熱くなるのを感じた。
「なに照れてるのよ。バッカみたい……。あなた、しっかり女でしょ。あたりまえのことじゃん」
「そりゃ、そうだけどさ」
理屈では分かっていても、お腹の中に別の人間が住むなんて、なんだかとても変だ。
……歯にものがはさまっただけで気持ちが悪いのに、赤ん坊のような大きなものが入ってしまうなんて……。痛いんだろうなあ……。なんか恐ろしいよなあ……
フィレーナは、思わず、自分のお腹をおさえていた。
アマネラは、ふっと息を吐くと……、
「もう大丈夫……。さあ、行きましょ」

アマネラは立ち上がろうとした。

あわててフィレーナが抱き上げようと駆け寄った。

まさにはれものにさわる思いだった。

アマネラはフィレーナに首をふり、

「いいのよ。一人で立てるわ。そんなに気をつかわなくても、妊娠は女にとって、あたり前のことですもの……」

一人で立ち上がったアマネラは、いたるところに転がっている流民狩り(ハンター)たちの死体を見て肩を落とした。

「ずいぶん、殺してしまったわ」

「流民狩り(ハンター)は、僕らを殺すつもりだった。やらなきゃ、こっちがやられている。仕方がないよ」

……ほんと、仕方がないんだよね……

フィレーナは、さっきまで感じていた殺しへの動揺(どうよう)に弁解するように喋(しゃべ)る自分を皮肉に思った。

「でもね……」

アマネラは、ぽつりといった。

「お腹の赤ちゃんはどう感じるのかしら」

「えっ？」

フィレーナはアマネラを見つめた。

「人を殺そうとしたときの、わたしの荒れた気持ち……。きっと、赤ちゃんに伝わっているわ」

「まさか……、お腹の中にいるんですもの、外の様子が分かるはずないわ……。でしょ？」

リラはピョコンと首をかしげた。

自分でもよく分からないことを決めつけていうときに見せる、リラ独特のそぶりだった。

「いいえ、母親の感情はお腹の中の赤ちゃんの性格に影響するんですって……。母親がイライラしていると気持ちの落ちつかない子供が生まれ、いつもやさしい気持ちで母親がいると、気立てのいいやさしい子供が生まれるっていうわ」

「ほんとなの？」

「ええ、子供の性質って、生まれてからより、お腹の中にいるときに決まることが多いんですって」

「はあ……」

リラは腕を組んで考え込んでしまった。

リラは自分の今の性格を分析した。

かなり、胎児の母親としては不行き届きのある性格だという自覚症状がある。

女の子としてはいささかお元気すぎるというか、能天気というか……。だいいち大好きな遊戯舞踏音楽を聞いたりして、リラと一緒にお腹の中で赤ん坊に踊られたりしたら腸捻転を起

こしかねない。
もっとも、そのおかげで乗り物酔いには強い子が生まれるかもしれないが……。
リラはしみじみと呟いた。
「わたし、子供生むときゃ、性格、変えなきゃ……。あーあ、難儀(ハード)だなあ、生むっていうのも……」
「ええ、難しいわ」
アマネラは頷いた。
「わたし、お腹の子に、性格だけはやさしい子でいてほしいの……。だから、あなたたちに会ったとき、殺せたけれど、できなかったわ。わたしの殺気を子供に植えつけたくなかったから……。でも、今は殺さなければ、わたしの部族がやられてしまう……。きっと、わたしの子供は人を殺せる私を受け継ぐわ。いえ、もっと荒れた性格で生まれるかもしれない」
フィレーナは、さっきいった言葉を繰り返すしかなかった。
「仕方ないよ。そうしなければ生きていられないんだ」
「ええ、仕方ないのかもね。流民(ウォンダーナ)をしている限り……」
アマネラはフィレーナを見つめた。
「フィレーナさん……」
「えっ」
「わたしが闘技(バトル)が好きで、簡単に人を殺せるのはね、両親がやっぱり流民(ウォンダーナ)で、気持ちが荒れ

ていたからかもしれないって思うときがあるの……。あなたも闘技のできる人よね。あなたはどうだったのかしら……」
「僕は……」
フィレーナは詰まった。
それは、アマネラにいわれるまで考えたこともなかったことだった。
フィレーナは、帝国に滅ぼされた国フィロセラの国王の子だ。
フィレーナが王妃のお腹の中にいたころは、多分、フィロセラは激しい帝国の圧力にあえいでいたはずだ。
国王も王妃も、帝国を恨み、呪い続けていたことだろう。
そんな王妃の感情をフィレーナが受けついでいるとしたら、無謀にも帝国に逆らって、フィロセラを再興しようとする自分……、仕方がないと弁解しつつも、結局は人を殺してしまえる自分……、そして行く先々で、累々たる死者と出会ってしまう自分にも説明がつくのかもしれなかった。
……滅ぼされた国フィロセラの、帝国に対する憎しみと怒りによってフィレーナの性格が作られたとしたら……。僕は……、僕は、生まれたときから戦うようにできていたことになる……。なにも闘技士として育てられなくても、生まれながらにして、敵と戦い、そして殺せる闘技士の資質を持っていたことになる……
……だったら、なぜ、僕は殺すことにとまどいを感じるんだろう……

フィレーナは、今の自分自身を、どう考えたらいいのか混乱していた。
フィレーナはアマネラに答えた。
「分からないよ。僕はものごころついたら、闘技士にされていた。生まれる前のことなんか知らない。生まれる前のことも死んだ後のことも考えたことなかった」
それしかいいようがなかった。
アマネラは、やさしい表情で頷いてから、フィレーナの肩に手をやった。
「さあ行きましょう。こいつらの仲間が、まだ近くにいるかもしれないわ。どっちにしろ流民(ハン)狩り(ター)を始末した以上、わたしたちの今の集落(キャンプ)が流民処理局に知られるのは時間の問題だわ。今すぐ移動しなきゃ追手(おって)がやってくる。あなたたちも移動を手伝ってね」
「ああ、いさせてもらうんだ、なんだってするよ」
「掃除(そうじ)、洗濯(せんたく)、お料理以外なら、まかせておいて！」
リラが胸を張った。
「リラのこういうところは、僕より、ほとんど男の子しているよな」
フィレーナは肩をすくめた。
「いいのよ、女の子はそれで……。別にすることがいっぱいあるわ」
アマネラがニッコリ笑った。
「あん？」
フィレーナとリラは顔を見合わせた。

「さ、急ぎましょ……」

二人は岩場からアマネラの集落(キャンプ)に降りていった。

*

その日のうちに、アマネラの集落(キャンプ)は移動を開始した。

数日後、別の流民狩り(ハンター)の一団が岩場を通りかかり、流民狩り(ハンター)たちの死体を発見した。

彼らは、一撃で倒されている死体と、なにより牙の噛み傷に恐れをなし、後を追おうとはしなかった。

彼らは、その地方の流民処理局(ウォンダーナオフィス)に報告し、わずかな手数料で満足することにした。

しかし、流民処理局(ウォンダーナオフィス)の係員の一人が、ある事実に気がついた。

死体の発見された岩場からそう遠くない山脈の奥に、山岳盗賊団(さんがくとうぞく)の本拠地、リトル・ラリテニアがあった。

リトル・ラリテニアは全滅したものの、もしも生き残りがいて逃げのびたとしたら、流民狩りとの衝突も考えられる。

しかも現場の近くで、流民の中で最も逃げ足の早い遊牧民族系の集落(キャンプ)の跡が発見された。

もしも、闘技(ハトル)にたけた盗賊団と遊牧民族の流民が行動をともにすれば、流民狩り(ハンター)だけの力では手に負えない危険性もあった。

流民処理局の係員は、上司と相談のうえ、ボーの帝国中枢部に報告した。

帝国中枢部の電算局(コンピュータオフィス)には、その日に帝国全土で起こった厖大(ぼうだい)な数の事件記録が集まってくる。
地方では大事件であっても、帝国全体からみれば、ほとんどが取るに足らない些細(ささい)な事件にすぎなかった。
流民処理局の報告は、そんな記録のさらに瑣末(さまつ)な部分に登録された。
だが、その記録を見逃さなかった帝国の機関があった。
帝国機密情報兵団……、通称「黒い悪魔」だ。

*

帝国の首都、ボー。その帝国機密情報兵団中央本部の小会議室で、黒い鎧(よろい)を着た「黒い悪魔」の中間管理職クラスが数人で会議をしていた。
「リトル・ラリテニアとこの事件のつながりだが、ドラ地区担当の君としては、どう見るかね」
「黒い悪魔」の一人がテーブルの隅(すみ)にいる鎧に聞いた。
「疑わしきは、徹底排除です。一介(いっかい)の闘技士(バトラー)の脱走から始まったこの事件は、山岳民族リトル・ラリテニアを巻き込み、ドラ支部上層部の処分にまで波及しました。これは当初、誰も予想しなかったことです。さらに、今また、遊牧系の流民(ウォンダーナ)を巻き込んだとすれば、その流民がたとえ少数であろうと、この先、どこに影響が出てくるか分かったものではありません。こと

は、ドラ周辺だけでは済まなくなります」

「だが、リトル・ラリテニアは完全に消滅し、生存者はいないはずだろう」

「確かに完璧な調査の結果、リトル・ラリテニアから生きて逃げ出した者はいないとされています。しかし、この闘技士の事件は、完璧に処置したはずの後に、どこからか芽をふき出します。それも闘技士だけでなく、山岳民族、そして、もしかしたら今度は遊牧民族……、そしてなにより無敵のはずの『黒い悪魔』の消耗は、われわれ自身が処分した者二十数人をふくめて四十名を越えているのです」

「四十名か……」

「これ以上、禍根を残せば、われわれ中央の中間管理職にも責任の追及の手が及びかねません」

「だが、万が一、リトル・ラリテニアの残党と遊牧流民が結びついたとしても、大陸の海岸線は広い。彼らの逃げ足も早い。発見は容易ではあるまい」

「少数の流民狩りはあてにしません。軍上層部に圧力を加えて、帝国軍兵士を動員します」

「しかし、帝国人民は海の毒に弱い。たとえ帝国軍兵士といえ、戦いが長びけば、完璧な討伐は難しいぞ」

「彼らは、問題の遊牧流民を発見しさえすればいいのです。あとは『黒い悪魔』がけりをつけます。『黒い悪魔』の鎧の兜には、毒気清浄装置が装着されていることを、よもやお忘れではありますまい。『黒い悪魔』の精鋭なら、数人で、遊牧流民の一部族など簡単に全滅させら

れるでしょう」
一同は、ドラ地区の担当の「黒い悪魔」の意見に同意した。
会議が終わり、立ち上がった議長格の「黒い悪魔」が、ドラ地区担当にささやいた。
「しかし、この事件のきっかけになった闘技士だが……、なんといったかな」
ドラ地区担当は、失念していたのか、電算手帳を出し、スイッチを押した。
「フィレーナ……、海洋民族系の名前ですな」
「海洋民族か……。海と山と草原……、まさか、そのフィレーナとやらまで生きてはおらんだろうな」
「ありえません。その闘技士は、リトル・ラリテニアで死んだはずです。なにしろ、われわれ『黒い悪魔』が延べ十人で追いつめたのですからな」
「しかし、その十人の悪魔は、今、誰も生きてはおらぬのだろう？」
「えっ？」
ドラ地区担当は思わず言葉に詰まってから、首を振った。
「ありえません」
「だといいのだが……」
「この世にフィレーナがいるとしたら、海洋民族のありふれた名前、数百万はいるフィレーナという奴隷の、少なくともその闘技士とは別の一人です」
「数百万のフィレーナか……。並の数ではないな」

議長格の兜から、何げなく溜め息ともつかぬ息がもれた。

第3章

惨劇の原野

アマネラの部族の逃げ足は早かった。

その手際のよさには、フィレーナもリラも、目を見張るばかりだった。

岩場から集落に戻ったアマネラが、天幕から出て来た毛皮の女に一言、二言、話しかけると、女は腰につけた袋笛を吹きならした。

たちまち風船の空気が抜けるように天幕がしぼみ、あれよあれよという間にたたまれて、馬や牛の背に乗せられた。

なによりフィレーナとリラが驚いたのは、その作業をやっているのが女たちだったことだ。

天幕からのろのろと出てきた数人の男たちは焚き火のまわりに坐り、酒を飲みながら、ぼんやりと、動きまわる女たちを見ている。

めまぐるしい女たちの働きに呆気にとられていたフィレーナだったが……。

「あの……、僕にできることは？」

とりあえずアマネラに聞いた。

額の汗をぬぐいながら、アマネラはフィレーナの倍ほどある荷物を指さした。

「とりあえず、あなたにはこれを運んでもらうわ」
　リラはポカンと口を開けた。
「運ぶって、どうやって？」
「背中にかつぐしかないでしょ。あなたにはこれね」
　アマネラの指さした荷物もたっぷりリラの体重分はありそうだった。
「あのね、わたし、匙（スプーン）より重いもの持ったことないんだけどなあ……」
　フィレーナはリラの肩をポンと叩（たた）いた。
「匙（スプーン）を投げるなよ。やればできるさ。いいかい？　居候（いそうろう）させてもらうんだ。匙（さじ）を投げたら……」
　リラは肩をすくめた。
「はい、はい、食事もできない」
「そういうこと」
　フィレーナは、渾身（こんしん）の力をふりしぼって、荷物を背おった。
「あーあ、匙は投げないけれど、ナイフを投げつけたい気分だわ」
　文句をいいながらも、リラは手につばをつけ、
「よ～し、やったるか！」
　リラは荷物を背に乗せたとたん、
「ムギュ！」

かえるがつぶれたような声をあげた。
荷物に押しつぶされたのだ。
その悲鳴よりも、荷物の下のリラの姿のほうが、車輪にひかれたかえるに似ていた。
「ごめんなさい、リラさんには無理みたいね」
アマネラは苦笑して、リラを押しつぶした荷物をひょいと持ち上げた。
目を回しているリラの代わりに、フィレーナが答えた。
「う、うん……。リラには無理みたい」
荷物の重みに歯を食いしばっている。
手足の筋肉がぷるぷる震える。
いくら闘技士とはいえ、体格の小さなフィレーナには、重量挙げが、最も苦手だった。
アマネラは肩をすくめ、
「あなたも、少しだけ無理なようね」
「え？　いや、大丈夫……」
そこまでいって、
「じゃなかったみたいです……、はい」
後ろにひっくりかえった。
リラがつぶされたかえるなら、フィレーナは裏返しにされた亀だった。
「しようがないわ。同じ女でも、わたしたちとは違うものね」

アマネラは、フィレーナの荷をこともなげに持ちあげた。

「これは牛に乗せましょ。あなたたちは、リラさんの荷物を手分けして持ってね。その荷物、あなたたちの住まいに貸す天幕なの」

「僕たちの住まい？」

「ええ。せめて、自分の住まいは自分で持たなきゃね」

「いえてる。ありがとう、アマネラさん」

リラは感謝を込めていった。

それからフィレーナを見つめて、ニッコリ笑った。

「家を持つのは亭主の甲斐性よね」

「あん？」

フィレーナは、思わず後ずさる。

「われらの旦那は、フィレーナ、あなたでしょ」

フィレーナは、たまらんといいたげに首をふりつつ、

「分かりましたよ。僕が持ちますよ」

「すねない、すねない。家財道具はわたしが持つわ」

「家財道具……？」

「おなべに、お皿に、ナイフに……、えーと、匙にナイフは投げないわ」

リラは荷物の中から食器を取りだし、ひもに結んで肩にかけた。

フィレーナは、肩をすくめて言った。
「リラ、きみはいい奥さんになれるよ」
リラはフィレーナの皮肉にニッコリ笑って、
「ありがとう……、わたしも自信があるわ。だってちゃんと旦那をたてているんだもんね」
「こっちは立っているのがやっとだ」
溜(た)め息(いき)をつきながら、フィレーナは呟(つぶや)いた。
女たちの吹く袋笛(バッグパイプ)が響いた。
「さあ、出発よ」
アマネラが声をかけた。
そのとき、リラがすっとんきょうな声をあげた。
「あっ、あんなのあり!?」
リラがポカンと口を開いて指さすほうをフィレーナが見ると、焚(た)き火(び)のまわりにいた男たちが、弾力座布団(クッション)を敷(し)きつめた馬車(コーチ)に乗り、相変わらず酒盛りをしていた。
女たちは、皆、大きな荷物を背おい、歩き始めている。
「あの男どもは何なのよ」
リラが呟いた。
「わたしたちの夫なの」
アマネラが答えた。ほおを赤らめ、照れ臭そうだった。

アマネラは身重の上にさらに重い荷物を背おっている。

「夫ですって!?」

リラの眉（まゆ）がきっとひきつった。

「怒ったぞ……」

リラはぼそりといった。

「リラちゃんこと、もっとも女らしい魅力の持ち主、接客用奴隷（エンタテインメントクレチア）のリラは女として怒ったぞ」

リラはつかつかと馬車に歩いていった。

「あなたたち、何よ。その態度、その姿勢……。男として恥（は）ずかしくないの？」

酒に酔い、どんよりにごった目で、男たちはリラを見すえた。

「なんのことだ？」

男の一人が聞いた。

「あんたたち、男のすべきことをなぜやらないの」

リラは食ってかかる。

「男のすべきこと？　なんだ？」

男はよどんだ目で、隣の男に話しかける。

「ああ……、子供が欲しいんだよ。こいつも」

「あん？」

リラは、男たちの会話の意味が、一瞬、分からなかった。
「悪いがな、ねえちゃん」
男はぐいっと酒を飲み干して、リラを見すえた。
「今日の仕事は終わった。俺たちはお休みの時間だ。悪いが、やるんなら、移動先に行ってからにしてくれ」
「それに、俺(おれ)はガキは好みじゃねえんだ」
もう一人の男がいった。
「なんのこっちゃ？」
リラは、まだ分かっていない。
「要するに、今日はもう抱きたくないんだ」
「抱く!?」
「疲れてるんだよ。悪いな」
「ごめんよ……」
もう一人の男がすまなそうにいった。
本来なら下卑(げび)た会話なのだが、男たちは本当に疲れきり、無気力だった。
「ちょっと、あなたたち、何か勘違(かんちが)いしているんじゃない？　わたしがここに来たのはね……」
「抱かれに来たんだろう？　なあ、それっきゃないだろう？」

男たちは、いかにもうんざりした顔で頷きあった。
パシン！
男のほおに、リラの平手がとんだ。
「なんちゅうことを……、おぞましい……」
そこまでいって、リラはポカンと口を開いた。
男はほおを押えて、後ろにひっくりかえっていたのだ。
あまりのもろさに、リラは叩いた自分の手を思わず見つめた。
男は顔をゆがめてリラに抗議した。
「なにをするんだよう……。もう抱いてやらないからな」
リラは胸がむかついてきた。
「抱いてやらない？……誰が？……誰を？……誰が抱いて欲しいっていったっちゅうの……」
「子供が欲しいんだろう？　ねえちゃんも」
男たちは、おびえているような上目づかいでリラを見て、機嫌をうかがうようにいった。
リラは天を仰いだ。
「なんじゃ、こりゃ？　これでも男か……」
「男よ。わたしたちの大切な夫たち……」
アマネラが、いつの間にか、リラの傍らへ来ていった。
「これが大切なしろもの？……」

少なくとも、リラのイメージする男という種類の人間とは違いすぎた。
奴隷の中には、帝国人民の男相手の男がいることをリラは知っている。女の格好やそぶりをする男たちだ。
いや、本人自身、女になりきっている男もいる。
しかし、彼らもまた男だ。
だが、ここにいる男は違って見えた。
……男でもなく、女ぶりっこの男でもなく……、これは、いったい、何なんだ……
アマネラは、もう一度、リラに繰り返した。
「ええ、大切な男……。子供を作るためには、いてもらわなければならない夫よ」
「そんだけの男？」
「いいえ、炊事に洗濯をしてくれるわ……。ときにはわたしたちも愛したいと思うときもある……」
「愛したい？……」
リラは肩をすくめた。
「わたし、分かんないよ……、アマネラさんの気持ちが……。ねえ……」
リラはアマネラの後ろで荷物を背おって、ポッンと立っているフィレーナに同意を求めた。
フィレーナは何も答えられなかった。
……僕は、まるまる女として育てられたリラとは感じ方が違うし、まして子供を生みたいと

思うアマネラの女の部分も、よくは分からない……

……かといって、馬車に乗って、酒を飲んだくれている無気力な男たちの気持ちも分からない……

……体は確かに女であっても、気持ちは……、多分、男とも違っているのだろう……

フィレーナは、自分がどういう人間——いや、生き物なのか、それすら分かっている自信がなかった。

アマネラは、リラに微笑していった。

「リラさんのいいたいこと、わたしも分かるわ……。でもね、わたしたちはこれでいいの」

「じゃあ、アマネラさんのお腹の子のお父さんは、この中の誰なの？　アマネラさんが愛したいと思った人は誰？……」

失礼な質問だと、リラは思った。

きっと、アマネラは気を悪くするに違いない。でも、女として、リラはアマネラに聞きたかった。

アマネラは馬車の上の男たちを見ずに答えた。

「その中の一人であるのは確かよ。血液型でも調べれば、誰だか分かるかも知れないけれど、それはどうでもいいこと……」

「父親は誰でもいいっていうの？」

リラの口調は元気がなくなっていた。

アマネラのような子供の生み方は、たとえ男のなぐさみ用の奴隷として育てられたリラであっても、十六歳の娘として考えたくなかったのだ。

アマネラは、

……仕方ないのよ……

とでもいいたげな微苦笑を浮かべた。

「少なくとも、わたしのお腹の子はアマクネ族の血をひいているわ。それに、なにより、わたしの子供だってことは、誰が何といおうと確かでしょう？」

馬車の傍らを、部族の子供たちが走るような足どりで追い抜いていく。

走っているのはみんな女の子だ。

それぞれが肩に、子供にしては大きく重そうな荷物を背おっている。

後を追うように馬に乗せられた数人の男の子たちが続く。

アマネラは、自分の子供を見るようなおだやかな表情でいった。

「あの子たちも、誰が母親かは、しっかり分かっているの」

リラはがっくり肩を落として、やりきれなかった。

リラは自分の母親も父親も知りはしない。

それだけ、なおさら、母親だけが分かっている子供がつらかった。

「やだなあ、そういうの」

アマネラはリラには何もいわず、フィレーナに振り返った。

「さあ、急ぎましょ。あなたたちにとっては、けっこう大変な移動になるかもしれないわ」

フィレーナは黙って頷いた。

＊

アマネラの部族は、海岸線を走るような早さで移動していった。

アマクネ族の女たちは、闘技士のフィレーナが舌を巻くほど強靭だった。

重い荷を背おいながらも、ほとんど休まず歩き続けるのだ。

移動は昼夜を徹して行われ、アマクネ族を狙った流民狩りを全滅させた岩場は、はるか遠くになっていた。

別の流民集団とも何組かすれ違ったが、互いに何の交渉もなかった。

情報の交換すらしなかった。

もしも、互いの情報を知っていれば、流民狩りや、帝国軍に捕えられた際に、すれ違った集団の存在を漏らしてしまうだろう。

互いの情報を知らないことが、それぞれの集団を守る一番の防衛策だった。

フィレーナもリラも、ほとんど無言で歩き続けた。

話し合おうにも部族の歩みが早すぎて、ついていくのがやっとだった。

下手に何かを喋ろうものなら、舌を噛みそうなほど早足な移動だった。

わずかな仮眠の時間も疲れ果てて、話をする気力も起こらなかった。

だが、フィレーナは、それがかえってありがたかった。
……あの赤茶色の海を見たころから、いつも頭の中をよぎっていること……。男として育てられ、闘技士の感覚で人を殺せもする女フィレーナ……。僕はいったい何なのか……。女としてなら、たとえ父親が誰でも、子供を生もうとするアマネラのほうが、自分よりよほど女らしく思えもする……。それに抵抗を感じるリラの気持ちも分かる気がする。何度も思う……、僕……、フィレーナって何なんだ……。フィロセラの後継者として、たとえ万が一、フィロセラを再興できたとしても、海の国フィロセラが、あの汚潮（ダーティタイド）にまみれた海で生きて意味があるのだろうか……
嫌（いや）でも浮かんでくるそんな思いを、懸命（けんめい）に歩き続けることで少しは忘れられた。
そして移動して七日後、牛や馬が食べるのに適した雑草地帯を見つけたアマネラの部族は、そこにしばらく住みつくことにした。
彼女たちを追う帝国の動きを、知るはずもなかった。

*

帝国軍兵士を動員した捜査は続いていた。
一カ月後、狩り捕った遊牧民系の部族は六、その他の流民集団は十二を数えた。
殺害されたもの八千人、奴隷（クレチア）に売られた者六千……。この捜査で、逃げ回っていた一万四千の流民がいぶり出された。



だが、海に近づきすぎて、海の毒気で命を失った帝国軍兵士は千五百人。軽度の症状と生命にかかわる重態の差こそあれ、病院の入院治療の必要があった兵士は六万人を越えた。

しかし、それでもまだ、アマネラの部族は捜査の網をくぐり抜けており、しばらくは平穏(へいおん)な日々が続きそうだった。

*

二カ月が経った。

春の盛りだ。

原野には名も知れぬ花が無数に咲き乱れ、暖かな日差しの下で春を歌っている。

アマネラの部族の女たちは、帝国や流民狩りに追われ続けているにもかかわらず、明るかった。

女たちは馬に乗り、野を駆け、牛や羊たちを追い、乳をしぼり、かいがいしく働く。

そして午後は、闘技(バトル)の稽古(プラクティス)……。フィレーナが見ても、かなり高水準の闘技術(バトルテクニック)を女たちは身につけている。

それにひきかえ、男たちは、食料を大きななべにぶち込むだけで炊事と呼ばれる仕事……、衣服を同じなべにいれて室内走行機(ルームランナー)そこのけに足ぶみをして洗う洗濯のほかはなにもせず、だらだらと酒ばかりを飲んでいる。

……ほとんど粗大ゴミよね……

最初は文句をいっていたリラだが、そんな男たちにあきれているのもばかばかしくなったのか、最近は全く無視している。
それより、奴隷だったリラには、今まで経験のなかった乗馬や、牛の乳しぼり、乳を発酵させるチーズ作りが楽しく、まるで種つけ奴隷のように飼われている男たちには何の興味もわかなかった。
夜になると、女たちの宴が開かれる。
焚き火を囲んで、袋笛に合わせ、昼間の仕事の疲れも見せず、踊りまくるのだ。
女たちは、男たちと違って酒を飲まない。
だが、激しく身をくねらせ、汗をほとばしらして踊る姿は、まるで酔っているように見える。
踊りの興奮が頂点に達したとき、一人、また一人、女たちは、男たちのいる小屋に姿を消していく。
残されたのは、老婆と子供と、数人の女たちだ。
「あの女の人たちは、今、お腹に子供がいるの」
アマネラが呟いた。
「じゃあ、あとの女の人たちは？……」
リラは眉をひそめて聞いた。
「子作りって、大変だわ」
アマネラは、それだけいって、そっと自分の腹を撫でた。

リラは天を仰いで溜め息をついた。

「ついていけない……、わたしゃ……」

この部族の男たちは、女たちの夜のためにだけ存在しているようだった。

そんなある日、フィレーナは、アマネラと海へ釣(つ)りに出かけた。

原野の春のすこやかさにくらべ、海は相変わらずよどんだ赤茶色の顔を変えない。

「こんな海で魚が釣れるの？」

「魚がいたとしても、とても食べられやしないわ。わたしたちは魚を釣りにいくんじゃないの」

アマネラは、タコの足のように吸盤のついた硝子棒(クリスタルバー)を見せた。

「これが、この釣りのエサと釣り針よ」

「この棒が？」

フィレーナは、首をかしげた。

「この棒はね、硝子(クリスタル)に反応して、磁石(じしゃく)のようにくっつく性質があるの……。海の中には、帝(エン)国人民(パイアラー)のたれながしたゴミがいっぱいあるわ。その中には、武器になる硝子(クリスタル)の破片もまじっていることがあるの。それを釣り上げるわけ」

「硝子(クリスタル)の破片？」

「年中、大陸中を逃げまわっていて、硝子(クリスタル)をなかなか手に入れられないわたしたちには、破片でも貴重よ。わたしの弓矢にひもがついているのは、早く射るためじゃなくて、矢を無駄(むだ)にしたくないからなの」

海を見降ろす岩場には、すでに数人の女たちが来て釣り糸を垂らしている。

「自分たちの武器は自分で作るのが、わたしたちの決まりなの……。この釣りって、潮の流れを読んで、硝子(クリスタル)の集まりそうなところを見つけなきゃならないの……。けっこう難しいわけ。釣り上手がいい武器を作れて、それが結局、自分の命を守ることにもなるわ。だから、みんな、真剣。わたしたちの中で喧嘩(けんか)が起こるとしたら、いい釣り場の取り合いのときぐらいね」

フィレーナは、釣りをしている他の女たちを見た。

ときどき引き揚げられる釣り針がわりの硝子棒の先には、砂のような硝子(ガラス)の破片がキラキラと光っている。

「あんな小さなもので武器を作るの？」

「ええ、破片を集めてね。矢尻一本作るのに二年はかかるわ。子供を作るより大変よね」

アマネラの会話には、絶えず、子供の話題が出てくる。

フィレーナは呟いた。

「子供か……」

「変に思えるでしょうね」

アマネラは岩場に坐(すわ)り、釣り糸を垂らしながら、いきなりフィレーナにいった。

「えっ？」

「わたしたちのこと……、他の民族とは、少し……、いえ、だいぶ違うでしょ？　女が武器を持って戦い、日常の仕事もこなしてしまう……。男は家でじっとして、子作りの道具……。あ

べこべよね、普通と……」
「かもしれない……。でも、奴隷(クレチア)は勝手に人を好きになったり、子供を作ったりできないから、僕たち奴隷(クレチア)よりはいいのかなあ……、とも思うけど……」
「人を好きになるかあ……」
アマネラは、赤茶けた海の向こうをじっと見つめた。
「昔はね、わたしたちの部族も、男は、強くて、たくましくて、頭が良くて、素敵(すてき)だったそうよ」
「そう……」
「でも、そんな男はもういないわ」
「えっ？」
「帝国との長い戦いで、男はほとんど死んでしまったの。残ったのは、病弱で戦えないひ弱な男か、死ぬのを恐れる臆病者(おくびょうもの)……。そして、戦いの恐怖で神経が切れてしまった無能な男たち……。そして、生まれてくる男の子は、年々ひどくなる空気や水の汚染に耐えられなくて、生まれてすぐ死んでしまう子が多かったんですって……。いつの間にか、わたしたちの民族に、他の人たちが男と呼んでいるような男はいなくなってしまったの……。そしてまともに生きていけるのは、そんな環境に体質的に抵抗力の強い女の子だけ……。男がいないのだったら、わたしたち女がやるっきゃないでしょ……。女がやらなきゃわたしたちの民族は滅びてしまう……。それからですって……、女が自分自身で、自分の民族を続けさせようと思ったのは……」

「民族を続けさせるか……」
フィレーナは思う。
……僕らの海洋民族は、滅ぼされたことになっている。でも、僕は……、僕は海洋民族だけど、僕がいることが、海洋民族を続けていることになるのだろうか……
「でもね……」
アマネラが微笑した。苦い笑いだった。
「男が必要なのよね、子供を作るには……。人間って……、いえ……、動物のほとんどが、オスとメスがいなければ、子供はできない……」
……あたりまえのことだ……
とフィレーナは思う。でも、なぜアマネラは、そんなあたりまえのことをいいたいのだろう。
「でも、男はほとんどいない。わたしたちは、子供を生むために、今、生きている男を大切にしなきゃならないの……」
「なんか……、分からないけれど……、変だなあ……」
フィレーナは呟いた。
「変よね……」
アマネラも頷いた。
「僕さ……」
フィレーナは、ラリスとのことを話したくなった。

……リラにおとらず口が軽いな……
と思ったりもした。
でも、女って、安心できる相手に会うと、自分のことにおしゃべりになるし……、人に自分を知ってもらいたくてたまらなくなって……、その分……、十分……、フィレーナも女の血は引いているわけで……。
なんとなく、フィレーナは、自分に弁解しつつ話し始めた。
「僕も子供を生みたいなって思ったことあるんだ……。でも、子供を生みたいから生みたいんじゃなく、あいつと僕との子供だから生みたいなって思ったんだ。他の誰との子供でもいいってわけじゃないと思ったと思うんだ」
思ったことある。思ったんだ。思うんだ。
フィレーナは、そんな言葉を連発した。
フィレーナ自身……、そういうしか、そのときの気持ちを説明しようがなかったのだ。
「あなたは、いい子よ」
アマネラが、ぽつんといった。
「いい子？」
「思い込みがあるから……、好きとか愛とかに……」
フィレーナは、呆然となった。
……好き？　愛っ？　僕が？……そんなこと、闘技士の僕には関係ないことだった。まして、

そんなものに思い込みなどあるはずがない……
「けどね……、わたしは……、いえ、わたしたちの女たちは生みたいのよ。わたしたちの子供を……。好きな男の子供を生みたいんじゃなく、わたしの子供を生みたいの……。わたしたちが好きになったり愛せたりするのは……、たぶん、子供の父親じゃなく、生まれた子供にだわ……」
「分かんないよ、僕には……」
フィレーナは、そういったものの、分かるような気もした。
民族が滅びないためには、子孫が必要だ……。それを生みだせるのは女だ。子孫を生み出すことに喜びを見いだすって、たしかにすごいことだと思う。
「でも……」
でも……、でも……、でも……、そんな言葉が思わず口からもれてしまう。
「だったら、人間って、男と女なんて分かれてなくて、一人で子供が生まれるようになっていたらいいのにね。余計なこと考えなくても、自然に子供が生めるでしょ、生みたいときにさ」
アマネラは、いきなりするどい視線をフィレーナに向けた。
「それは違うわ。男女さん」
「えっ!?」
「いいものなの……、あれは……」
フィレーナは、アマネラを見つめた。

混乱していた。

「相手が好きとか嫌いとか、そんなことは別にして、いいものなの、あれは」

面と向かっていうアマネラの言葉には迫力があった。

「あれがいいから、生んでもいいと思うの……。そして、みんなもそういうわ、あれがいいから、生んでもいいって。苦しいけれど、生んでみたら、やっぱりよかったって……。そして、ほとんど、あれより素敵だってこと……。そこに相手の男なんて、多分……、関係ないわ。あれをして、子供を生むってことに」

フィレーナは、つらくなった。

「アマネラさん、僕……、あなたのいうあれ……、経験ないもん……」

アマネラは、ふっとやさしい表情に戻った。

「ごめんなさい。いいのよ、あなたはそれで……。わたしたちのように、子供を生むことに生きがいがあるっていうの……、たしかに変かもしれないわ、人間として……」

「そうかなあ……」

……分からないついでに、もう、みんな分からないことにしておこう……

フィレーナは、そう思った。

「けれど、動物って……、みんな、わたしたちと同じだと思うの……。子供を生み出すために生きているの……。必死で、自分たちの種を滅ぼさないように生きているの……。わたしたちは、帝国に追われて逃げているわ。明日、滅びるかもしれない。だからこそ、生み続けなけれ

ばならないのよ。それが、今、わたしたちはうれしいと思っている。生きていくことって、生んでいくことだと思うの……」

フィレーナは思わず頷いた。

「すごい演説だと思う……。アマネラさんのいってること……」

「酔えるでしょ。お酒なしで……、お酒なしで酔えるから、女っていい生き物よ……」

フィレーナは頷いた。

なんだか、やたらと自分がみじめだった。

闘技士をやめる決意をして脱走してから、さまざまな人に出会った。

どんな人間にも、なるほどと思える生き方の理屈があるような気がする。

それが、フィレーナにとって敵であろうと味方であろうと……、なにか納得させられてしまう。

なにしろ、フィレーナは闘技士(バトラー)という奴隷(クレチア)として育てられたのであって、人間として育てられたのではなかった。

闘技(バトラ)士指導(マスタ)員のゼナは、さまざまな知識や技術は教えてくれたけれど、人間のことは教えてくれなかったような気がする。

人間——の生きざま。

動物——の生きざま。

フィレーナの生きざま。

困ってしまう——。

フィレーナは、この世界に生きている動物や人間……、もちろん帝国人民(エンパイアラー)もふくめて……、否定や攻撃する基本になる自分が、どういうものか分からなかった。

……フィレーナ、お前は何なんだい……

……アマネラなら、自分の後に何万人の屍体(したい)がころがっていようと……、子供を生み育てるため仕方ないのですと、きっちり、いえてしまえるのかも……

……そうはいえずに、人が死ぬのは自分のせいだ……、なんてなやんでしまう僕は何なんだい……。えらそうじゃないのかい……

考え込んでしまうフィレーナを、アマネラはふっと笑った。

「いいコンビよね」

「えっ？」

「あなたとリラさんのこと……。単純ですものね」

「あ、リラは……、うん、単純かもしれない……。でも、いいやつです」

「ばかね……。単純なのはあなた……。リラさんは……、いい娘(こ)だわ。異民族の私だって、そう思う」

「あの……」

としかいいようがなかった。

「あの娘(こ)の不幸は、フィレーナ……、あなたが男じゃなかったってことだわ……。もしも、あなたが男だったら……、あの子はもっと素敵になるでしょうね」

「僕は……、リラを……、大切にしたいと……」
フィレーナは、詰まりながらいった。
「あの娘だって女なのよ……、フィレーナ、あなたが、女であるように……」
アマネラは、さとったような口ぶりでフィレーナにいった。
その言葉にはなぜか力があった。
フィレーナと年はたいして違わない二十歳前の女であっても、お腹の中にいる子供が、その力の一翼をになっていた。
そのときだった。
「フィレーナ！」
岩場にリラが走ってきた。
「うわさをすればリラさんだわ」
「フィレーナ！　来てよ」
リラは、坐っているフィレーナの腕をとった。
「早く来て！」
「なんなんだ？」
フィレーナは、手元の中型剣に手をやった。
リラが大変だというときは、たいてい身の危険にさらされているときが多い。
今だってそうなのかもしれない。

しかし、リラは目を輝せていった。
「生まれるのよ」
「生まれる？」
フィレーナのけげんそうな呟きを押し込めるように、アマネラが叫んだ。
「生まれたのね」
「うん！」
リラが頷く。
アマネラは立ちあがると、リラの手をひきずるようにして集落に走った。
フィレーナは後を追い、そして立ちすくんだ。
そこには荒い息をした馬がいた。
苦しそうだった。
フィレーナが苦しそうな生き物を見るとき、それは必ず死ぬ間際だった。
でも、その馬は違っていた。
下腹部から羊水をしたたらせながら、子馬がでてきた。
いつものフィレーナなら、顔をしかめたかもしれない。
しかし、今のフィレーナは、身動きできず、じっと馬の出産を見つめていた。
体をわなわなとふるわせるような衝撃が走り抜けていく。
「すごいじゃん！」

リラが呟いた。
「うん、すごいね」
フィレーナは正直に頷いた。
「生むって、すごいことなんだね」
アマネラは、微笑して呟いた。
「楽じゃないけどね、たぶん」
子馬は母馬の体から離れると、すぐに立ち上がった。
生まれてすぐ、信じられないほど、一人歩きしていた。
リラは、出産の興奮のさめやらない馬をなでながら、馬以上に興奮していった。
「あんた、すごい！　女ってすごい！」
フィレーナは、そんなリラを見つめながら、フーッと息をついた。
いままで闘技士（バトラー）として育てられたフィレーナは、男に負けまいとして生きてきた。
女でありたくないとすら思ってきた。
でも、フィレーナは、今、呆然として思ってしまう。女で生まれて、よかったのかもしれないと……。
……男って、闘技をして、ただもう破壊することしか知らないみたいなのに……、女は違う……、女は生みだすことができる。だから、たぶん男と違う強さがあるんだ。リラだって、ちょっぴり生意気だけど、生意気なりの強さってあるじゃないか……。そしてアマネラ……、こ

の人の、闘技もできて、快楽用奴隷そこのけの言葉づかいやものごしのやわらかさは何なのだろう……

フィレーナは、自分が女であるのも忘れて、女というものにあきれ……、そして感動するしかなかった。

子馬は、よろよろと、おぼつかない足で走り始めた。

母馬は、そんなことはもう通りすぎた昔のように平然とたたずんでいる。

フィレーナは、その強さに涙が出てきた。

が、そのときだった。

白熱光がほとばしり、子馬の体はあっという間に蒸発した。

母馬は一声いななくと、白熱光の発射された方向に走りだした。

そして前足をふりあげると、白熱光を放った男を蹴った。

男は帝国軍兵だ。

わきの岩陰から出た男が無雑作に母馬を大型剣で払った。

馬は首を斬り落とされ倒れた。

その男は黒い鎧を着ていた。

いまさっき、生命を生みだした命が、今はただの屍体だった。

そして数分前に生まれた命も、もう生きてはいない。

「よくも！」

アマネラは矢をつがえて射った。
だが、黒い悪魔の鎧は、平然とそれをはじき飛ばす。
「遊牧流民か……。始末はてっとり早くやろう」
黒い鎧の男は、帝国軍兵に声をかけた。
数十名の帝国軍が飛びだしてくる。
もとよりアマネラの部族の女たちも剣を抜いた。
だが、男たちは震えながら天幕の中に駆け込む。
まっ先にアマネラが斬り込んでいく。
だが、黒い鎧が受け止める。
……まずい……
フィレーナは、とっさにそう思った。
アマネラは、確かに強い。だが、女としてだ。
黒い鎧の男の腕は、アマネラの数段上に見えた。
「やめろッ！」
フィレーナは、中型剣を黒い鎧に叩きつけた。
黒い鎧は、かろうじてフィレーナをかわすと、さらにアマネラに斬りかかった。
そのすさまじい気迫に、アマネラはよろける。
フィレーナが、黒い鎧に斬りかかる。

かわした鎧が、アマネラの剣を叩き落とした。
「アマネラさん、それを！」
フィレーナが、自分の持っている中型剣を投げた。
だが、アマネラは受けとらなかった。
黒い鎧が、アマネラの腹部に向けてつっこんできたのだ。
アマネラは、フィレーナの剣を受けとれば黒い鎧の攻撃をかわせたかも知れない。
しかし、アマネラは腹部をかばって、黒い鎧に背を向けた。
大型剣が、アマネラの肩に食い込んだ。右腕がもげた。
だが、左腕はしっかり腹部をおさえて、アマネラは倒れる。
「アマネラさん！」
フィレーナが駆け寄る。
アマネラを斬られたことを知った部族の女たちは、気が狂ったように黒い鎧に斬りかかる。
フィレーナは、アマネラを抱き起こすと、近くの天幕に駆け込んだ。
アマネラは、あえいでいる。
腹部が波うっている。
リラが叫んだ。
「アマネラさん、生まれる」
「えっ？」

フィレーナは呆然とアマネラを見た。

アマネラはあえぎながら叫んだ。

「生みたい！　わたし！」

「生めるよ、絶対！」

フィレーナが叫ぶ。

しかし、アマネラの傷は重く、もう虫の息だ。

「生みたい……」

アマネラは、フィレーナが見ても助かりそうになかった。

アマネラの下腹部から、出血があった。

フィレーナは、アマネラの手を握りしめた。

「がんばって、もうすぐ生まれるよ」

アマネラが頷く。

アマネラの口からうめき声がもれる。

「アマネラさん、見えるわ、あなたの子が……」

リラが叫んだ。

見えはしない。だが、はげますためにこういうよりなかった。

アマネラは、いままでフィレーナたちに聞かせたことのない絶叫（ぜっきょう）をあげた。

女が誰でも出産に見せる生みの苦しみだった。

ふっと、その声がとぎれた。
「生まれた……ね」
アマネラが呟いた。
もう、その目はかすんでいる。
「うん、生まれたよ」
だが、アマネラの下腹部からでてきたものは赤ん坊の形をしていなかった。
頭が二つあった。
そして、死んでいた。
帝国の医者なら、平然というだろう。
……公害による奇型です。子供を生むなら、なぜ無菌カプセルの中で生まないのです……
と——。
母親だけで完全な子供が生まれる時代ではなかった。
だが、アマネラは、息絶えだえでフィレーナに聞いた。
「元気？　赤ちゃん」
フィレーナが答える言葉はひとつしかなかった。
「ああ、元気だよ……、とっても」
「男の子……女の子？」
分からなかった。そういう姿の赤ん坊だった。

だから、フィレーナはいった。
「女の子だよ……。きっと元気な子を生める女の子だよ……」
「そう……」
アマネラは、ふっと笑って、目を閉じた。
死んでいた。
「どうしてだい？」
フィレーナはリラに聞いた。
「どうして死んじゃうんだい」
リラは涙ぐむだけだ。
「どうして、アマネラさんだけじゃなく、生まれた子供まで死んじゃうんだい？」
リラが抱きかかえているアマネラの子は、今はもう、ただのたんぱく質のかたまりでしかなかった。
天幕の外では、女たちの悲鳴が聞こえる。
次々に帝国兵達に斬られていくのだ。
フィレーナは立ち上がった。
剣を取った。
「畜生(ちくしょう)！」
フィレーナは、天幕から飛び出した。

生きるも死ぬもなかった。ただ怒りだけで帝国兵に斬りつけた。
リラは呆然と立ちすくむだけだ。
返り血をあび、まっ赤になってフィレーナは兵たちを斬り続けた。
いままで闘技試合(バトルショー)ですら見せなかった殺気があった。
何十人、殺したか分からなかった。
ふと気づくと、帝国兵は誰も生きていなかった。
血がこびりついた手を剣から離したとき、目の前に黒い鎧が立ちふさがった。
「お前、何者だ……。闘技(バトル)の経験があるようだな」
「そうさ……。僕は闘技士(バトラー)だ。そして、お前を殺す！」
フィレーナは、黒い鎧につっ込んでいった。
「名前をいえ！」
黒い鎧は叫んだ。
「もしかしたら、お前、あの男か！」
フィレーナは、黒い鎧をにらみつけて叫んだ。
「僕は……、フィレーナ……。元闘技士(バトラー)……、いや、今も闘技士(バトラー)のフィレーナだ！」
「やはりな……。ならばわしもいおう……。フィレーナなら殺す。その目的で来たのだからな」
「僕にも目的ができた。お前たちを殺す！」
フィレーナは剣をかざしてつっ込んでいった。

第4章

攻撃の日々

フィレーナは、黒い鎧に斬りかかった。
黒い鎧は、しっかりと大型剣で受けとめる。
いつものフィレーナなら、飛びすさり、相手のすきを見定めるために、身構えるはずだった。
だが、きょうのフィレーナは違っていた。
闘技士の常識からいえば、メチャクチャだった。
フィレーナは剣を黒い鎧の大型剣に叩きつけた。
何度も何度も……。
気合の言葉もなかった。
ただ一言だけを呟き続けていた。
「殺してやる！　殺してやる」
自分が斬られることを、まるで考えていないような攻撃に、黒い鎧は、思わずたじろいだ。

……こいつは、自分が殺されるのをまるで考えていない。こいつは狂気そのものだ……
黒い鎧は、帝国内では優秀な剣士だ。
だが、それは人間を相手にしての話だ。
今のフィレーナのように、狂気そのもののような人間を相手にしたことはなかった。
黒い鎧は、後ずさった。
だが、フィレーナは前進を止めない。
黒い鎧は思った。
こいつとやるには、自分の傷を覚悟するしかない。
黒い鎧は、ひさしぶりに死にもの狂いになろうとした。
上段から斬り込んでくるフィレーナの剣を腕で受け止める。
鎧は、並の力ではびくともしない。
しかし、今は違っていた。
……馬鹿なッ！……
黒い鎧はうめいた。
それは、斬りつけたフィレーナすら呆然とした直撃だった。
黒い鎧の腕は、まっ二つに斬れていた。
女であるフィレーナに、これほどの力があったのかと思えるほどの力業だった。
もはや闘技とはほど遠い力まかせの攻撃だった。

……しまった……

傷の痛みも忘れて、黒い鎧は、もう一つの腕で剣をかまえる。
彼にとって、敵に身を斬られるなど、信じられないことだった。
黒い鎧は、選ばれた男だった。
傷つけられるはずのない男だった。
傷つけられるなら、その前に敵の剣を受け、即死しているはずだった。
こんな中途半端な負傷は、黒い鎧には、あってはならないことなのだ。
……このッ！……
黒い鎧は逆上した。
だが、それは、人並みの逆上だった。
それ以上にフィレーナは逆上していた。
黒い鎧の剣めがけ、つっ込んだ。
黒い鎧は、力に押され後ずさる。
フィレーナの力に黒い鎧が後ずさるなど、ありえないことだった。
だが、今は、あきらかに力負けしていた。
黒い鎧の背後は、いつのまにか崖（がけ）っぷちだった。
黒い鎧は、それに気づき青ざめた。
帝国人民（エンパイアラー）は、海を恐れていた。

だが、フィレーナは違う。
「死んじゃえ！」
フィレーナは、剣を叩きつける。
後ろを気づかう黒い鎧は、思わずフィレーナの剣を握った。
そのまま、二人は崖から落ちる。
だが、落ちながらもフィレーナは、剣を相手に叩きつける。
「畜生！　畜生！」
フィレーナの剣で、黒い鎧のもう一つの手ももげた。
だが、そんなこともかまわず、フィレーナは剣を叩きつける。
赤茶色の海面が迫る。
黒い鎧は悲鳴をあげた。
黒い鎧が悲鳴をあげるのも、生まれて初めてのことだった。
フィレーナはその声に我に返った。
そして、崖の中腹にある木の枝が見えた。
フィレーナは、飛びつく。
黒い鎧は、そのまま海に落ちた。
崖から落ちて一瞬のことだった。
フィレーナは、荒い息を吐きながら、崖の下の砂地に降りた。

「フィレーナ！」
リラが駆けてくる。
そして呆然と立ちすくんだ。
フィレーナは血まみれだった。
傷はない。
みんな、フィレーナの剣に倒れた男たちの返り血だった。
ザワザワと、フィレーナの背後の赤茶色の海が泡立った。
先刻落ちた黒い鎧が立ち上がったのだ。
リラが息を飲み、フィレーナの背後を指さした。
フィレーナは顔色一つ変えず、そのまま背後に剣をつきだした。
だが、その必要はもうなかった。
黒い鎧は、バラバラになって崩れたのだ。
鎧の間から、どろどろとした液状のものが流れでてくる。
それは、アマネラの赤ん坊を覆って(おお)いた液体に似ていた。
もう黒い鎧は人間の体をしていなかった。
あきらかに海の水につかったための末路だった。
フィレーナは顔をゆがめた。
……海って、こんなことしかできないんだ……。海の水を浴びた人が……、こんなになって

しまう……、たとえ帝国人だとしても……。海は、いろんなものを生みだせるはずだった。

僕、そう思っていた……。でも……

フィレーナの目から涙が出た。

……でも、ここには、死人しかいない……。なにも生みだせない……。僕も……、死人だけを……

フィレーナは剣を握りしめ、海のむこうをにらみつけた。

……いったい誰がこうしたんだ……

……誰でもいい！　敵がいるんなら出てこい……。僕は殺してやる……

だが、もうそこには、リラのほかは誰もいなかった。

アマネラの部族は、みんな死んでいた。

馬も牛も羊も、帝国軍兵に殺されていた。

そして、帝国軍兵も死んでいた。

そのほとんどが、フィレーナが殺した男たちだった。

夕暮れが近い。

空は、海の色のように赤茶色をしていた。

フィレーナの心も血にまみれていた。

……僕は……、僕は……、殺す！……

呆然と立ちすくんでいたリラは、やがてフィレーナに駆けよった。

「フィレーナ」
フィレーナは、リラに剣を向けた。
「なにすんのよ、わたしを誰だと思ってんのよ」
「えっ？」
ほとんどリラの胸に剣をつきたてる瞬間、フィレーナは相手をリラだと分かった。
そして、じっと自分の持った剣を見詰めなおした。
今、瞬間だが、駆け寄ろうとしたリラを、フィレーナは斬ろうとしたのだ。
……たぶん、リラは、今、生きている中でもっとも大切な存在なのに……
……それを斬ろうとした……
……僕は何なんだ……
絶叫したい気持ちを押さえながら、フィレーナは天を仰いだ。
……今まで何人が死んだ？　僕にとってかけがえのない人が……
今までは、帝国が、いや他人が、その人たちを殺したと感じたかった。
でも今、リラに剣を向けたとき、まさに自分が相手を殺そうとしているのを感じた。
……僕は凶器なんだ……。もし、これ以上、リラと一緒にいれば……、僕がリラを殺さなくても、誰かがリラを殺す……
……それは、僕がリラを殺したことと同じことなんだ……
……だからって……、だからって……、これまで死んでいった人のことを許せるか……



落とし前……、いや、そんな俗っぽい言葉じゃ表現できないぐらい、フィレーナの血は泣いていた。

「リラ、さよならしよう」

ぽつんとフィレーナが呟いた。

「えっ？」

「僕は、こんなに血まみれだ……。僕と一緒にいると、君まで血まみれになる」

リラは、フィレーナを見詰め返した。

もうリラはフィレーナになぐさめやいたわりをいってもしようがないと思った。

それは所詮（しょせん）、気安めにすぎないのかもしれない。

フィレーナは、今、自分が血まみれになることを自覚している。

怒りだけが、自分を動かす力だと思い込んでいる。

……なんとか……、さます方法は……

リラは、初めて一つの名を出した。

「フィロセラをどうする気？」

それは、知っていて、まだ一度も意識して口に出したことのない名だった。

フィレーナの母国、ふるさと……、この国を再建するために、フィレーナは、いままで苦労してきたはずだ。

「その血まみれの手で、フィロセラを生みだす気？」

フィレーナは、リラを見詰めた。
「そんなこと、もうどうでもいいんだ。僕はこの剣で、僕がかかわって殺された人をなんとかする。デビス帝国をぶっとばすまで、斬る。何人も！　きっと何万人も……」
「いままで何十人かもしれないけどさ、それっぽっちしか殺さなかった、あんたが？」
「えっ？」
フィレーナがリラを見詰める。
「何万人を殺せる？」
フィレーナは、黙った。
「偉そうに、何万人を殺せるっていうの？」
リラは思う。
……今まで垣間見たフィレーナの戦いに、これほど、狂気を感じただろうか？……
まるで、殺しを楽しんでいるようだ。
「殺せなきゃ、一人で終わり、殺せりゃ、百万人……、それは時の運……、ラッキーってもんさ」
フィレーナは、フッと笑ってリラを見た。
一瞬、そんなフィレーナに、リラは寒気を感じた。
「フィレーナ、フィロセラを忘れないで……」
リラがいった。

「あなたは、血まみれで、ご苦労さまって人じゃないはずだわ」
フィレーナは血まみれの手を見つめた。
「ほとんど、そんな人だよ。リラと一緒にいるには危険すぎる奴さ、僕は……」
リラは、キッとフィレーナを見つめた。
なんだか、自分の性格が変わってしまったのではないかと思えるほどに、きっぱりとした口調でいい返した。
「誰に話しているの？　私はリラよ……、フィレーナのリラ……。フィレーナがフィレーナである以上、あんたは、私のフィレーナだわ。あんたは私のために生きるべきなの……。その責任があんたにはあるわ……。だって、あんたは、わたしみたいな美人が……、いいえ、一歩さがって、かわいいわたしが……、当然、知るはずの何百人、いえ、わたしの魅力なら、何万人もの男からわたしをうばったのよ。どう取ってくれるのよ、その責任を……。何百万殺す前に、それ考えてよ」
フィレーナは、つまった。
リラの口の悪さは、いつものことだった。
しかし、今日のリラは、明らかにいつもの冗談めかした口の悪さではなかった。
「わたしね、あんたの奥さんとしてね、フィロセラの後継ぎとしたってね……」
リラも、アマネラの生み出そうとした生と、そして一瞬のうちの死に興奮していたのかもしれなかった。

そして、それ以上に、フィレーナを放っておけなかった。
「あんたを血まみれにはしておけないわけ」
「血まみれにしておけない？」
フィレーナは聞き返した。
「当然、風呂にでも入って洗い流さなきゃ！」
血を洗うという意味を、うまく使いわけてしまうリラだった。
リラは、さっさと水を小さなたらいのようなものに入れた。
水は、アマネラの部族にとって貴重なものだった。
なにしろ、近くの海ではまともな海水は取れないのだから……。
家畜と人間のために、雨水から取ったものを細々と使っていた。
だが、今は違う。
水を必要とする部族の人々は、誰も生きていないのだ。
「たっぷりな水だね」
フィレーナは思わず呟いた。
「や〜ね、そういう言い方……。死んだ人のぶんの死に水だわ」
リラが笑っていった。ちょっとだけ無理をしている言い方だった。
「でも、使える人がもういないんだから、目いっぱい使って文句ある？」
リラは、絶対、微笑を絶やさない。

……不思議な女の子だな……

いまさらながらにフィレーナは思った。

「とっとと脱ぐの！」

リラがいった。

「君が先に……、君だって、風呂、入りたいだろ！」

リラは、さらにニカッと笑った。

「いいの、あんたが先で。亭主を風呂に入れて、自分が風呂に入らない女房がいますか。後で入るわ」

「だって、水、血まみれだぜ。僕が入ると」

「別の水だって用意してあるの」

フィレーナは、肩をすくめた。

「あ……、そか……」

「とっとと入りなさい……。女同士なんだから、見られて困る体でもないでしょ！」

「ん？　ああ……」

フィレーナは、服を脱いで、たらいの中に入った。

「まあ～ま、汚れていること！」

リラは、たらいに入ったフィレーナの背中を洗いだした。

なんとなく、女性が女性の背中を流すのは変な気もしたので、フィレーナは、リラにいっ

た。

「いいよ。自分でやるから……」

なんだか、つっけんどんな言葉がリラから戻ってきた。

「いいよ、あんたは亭主なんだから……」

フィレーナの体から、先刻の惨劇の返り血が、たらいの水に広がっていく。

ほとんど血まみれだ。

目の前の海よりも赤茶色だ。

……何も生み出さない血の色だ……

ふっと、その水に目をとめたフィレーナに、リラがすかさずさりげなさそうにいった。

「落ち込まないように……、あんた女だから、血を流すってさ、子供を生むためでしょ。女は自分の血だけで結構。他人の血にまみれちゃたまんないわ……。なんて、いったりして、偉そうかしら?……」

フィレーナは、微笑した。

なんだか、ふっと、血まみれな何かが洗い流されていくような気もした。

「水っていいよね……」

リラが呟いた。

「うん」

フィレーナが答える。

「やっぱ……、あんた、水が好きなんだ。海が好きなんだ……」
「血まみれの海をかい？」
「ううん。女の子は、水が好き……、お風呂が好き、シャワーも大好き！」
　フィレーナはそんなもんかななどと思ってみる。
　確かに、闘技士（バトラー）に風呂好きはいなかった。
　男たちにくらべたら、女は、水が好きなのかもしれない。
　フィレーナが、闘技士養成所（バトラーファーム）の近くの湖を好きだったのは、やはり、フィレーナが女であり、水が好きだったからかもしれない。
　だから、フィレーナが海の魂だという意味だと知り、海の国、フィロセラの後継者だと知ったときに衝撃を感じたのかもしれなかった。
　……女って、水が好きなのか？　男よりも……
　もう、フィレーナの興奮は、かなり落ち着いていた。
「女は水が好き……」
　リラがもう一度呟いた。
「なんだか、やたら、女になれっていってるみたいだね」
「だって、女でしょ……」
「うん……」
　フィレーナは黙った。

「そろそろ、闘技士やめたら？……」
リラの言葉に、フィレーナは肩をすくめた。
「だって、闘技士だよ……。昔も……、たぶん、これからも……」
「そうかなあ……」
リラが、フィレーナの背を流しながら空を見た。
空はさらに血の色だった。
そのときだった。
クィーン！
それは、ギャッビーだった。
全部が殺された部隊の中で、狼犬のギャッビーだけは生き残っていたのだ。
ギャッビーは、フィレーナとリラを交互に見た。
あの戦いの中で、ギャッビーは生きのびたのだ。
ぼろぼろの体はしていた。
戦いのさなか、絶えず帝国軍兵にとびかかり、傷口をひろげながらも、生き続けてきたのだ。
ギャッビーは、フィレーナの体をなめた。
まるで、傷をなめるように……。
さらに、リラの首筋に鼻をすりよせた。

フィレーナは、思わず、ギャッピーの首に抱きついた。
「生きていたんだね」
「うん」
リラが答える。
「女好きで、殺し屋の彼がね。んでもって……、フィレーナのとこにやってきた。たぶん、この子、フィレーナを、絶対、女の子だと思っていたんじゃない？」
「そういうのは困る……」
フィレーナがいった。
……女であること、男であること……。それよりなにより、僕は……
フィレーナは、たらいから立ち上がった。
体中の血が流れ落ちた。
「わっ、きれいになったわ」
リラが、目を輝かした。
……もう、この人を血まみれにはしておかないわ……
しかし、フィレーナの中の体の血は、ふつふつと沸いていた。
どうしようもなかった。
リラの気持ちはありがたかった。
リラが、いかに、フィレーナを復讐の鬼から人間に戻そうとしているのかも、よく分かっ

た。

……でも、僕は、戦う！……

フィレーナは、きっぱりといった。

「別れよう」

リラもフィレーナを見詰めた。

「駄目みたいね」

フィレーナをどうにもできない自分がくやしかった。

「うん、駄目だ。もう、僕ときみとは、奴隷同士(クレチア)じゃない。殺し屋の僕と奴隷同士ではない一人の女の子なんだから……」

「じゃ、行きなさい」

リラが軽くいった。

その軽さに、フィレーナは驚いてしまった。

「あん？……」

「あとは、あんたとわたしは、勝手でしょ……。あんたの行くところに、わたしも勝手に行くわ。冗談じゃないっちゅうのよ、人さまを、女もどきと結婚させといて、偉そうに、フィロセラだの帝国への反逆だのいわれちゃって、後、ついていくこっちの身にもなってよ。わたしは、少女よ。自慢じゃないけど……、少女の青春、もてあそんでどうしてくれるのよ一」

フィレーナは思わずいった。

「それはないだろう……。僕は、君を助けたいから結婚したんだ」
「それはないだろうは、それはないでしょう。十五歳、十六歳、十七歳、そこらの女の子はね、男の人とはじめてのときなのよ。それを、なにもできない女の子なんかと結婚させられて、それはないでしょう」
フィレーナは、ポカンとリラを見た。
「女なんだね……、リラ」
リラは、親指を立てた。
「わたしは女よ……。だから、けじめをつけるのよ」
狼犬（ウルフドッグ）のギャッピーは、臭いでは両方、女には違いない二人の台詞（せりふ）のやりとりに、意味も分からず首をかしげている。
狼犬（ウルフドッグ）に言葉が分かっても、この二人の女のやりとりは、わけが分からないだろう。
「頼むから、ついて来ないでくれ」
「頼まれても、ついて行かないわけがないじゃない」
「僕に、どうしろというんだ」
「女はね、こうと思ったら恐いんだからね。あんたは、フィロセラをなんとかしなさい。馬鹿な喧嘩（けんか）なんか考えずにね」
「君にとやかくいわれる気はないよ」
フィレーナは、さっさと服を着ると、歩き出した。

……なぜ、僕がリラを、この殺し地獄に巻き込みたくないのを、分かってくれないんだろう……

分かっていた。リラには――。

……でも、もうわたしはとっくに巻き込まれている。わたしは、この人を、最後まで見詰めるわ……

それぞれの二人の女の思いは、言葉にはならなかった。

フィレーナの後を、リラはゆっくりと歩いてくる。

そして、狼犬のギャッビーも……。

すでに陽は暮れ、海の赤茶も空の紅さも分からなくなり、星がまたたいている。

どこへ行けばボーに向かえるのか分からなかったが、歩くよりなかった。

＊

そして、数日後、街道にさしかかったフィレーナは、仮面をかぶって踊り狂う数十人の女たちに出会った。

それは、首都、ボーに向かう悲しい女の集団……帝国の中では劣性と見なされ、子供の生めぬ処女の集団、デビス神女団たちだった。

「デビス！　デビス！　デビスに祝福あれ……。神女の踊りをめしあがれ」

彼女たちの行方は、ボーだった。

フィレーナもリラも、当然、神女団（ミメズ）にもぐり込もうとした。
思えば、フィレーナもリラも神女団（ミメズ）も、悲しい女たちといえないこともなかった。

第5章

神殿の謎

神女団（ミメズ）の集団は、歩き続けた。行く先は、いうまでもなく帝国の首都ボーだ。彼女たちは何の目的で首都に向かっているのか、自覚はしていない。ただ、無目的に、そちらの方向に踊りながら歩いているにすぎないのだ。

フィレーナとリラは、静かに、彼女たちに近づいていった。そして、彼女たちが休息の際、はずした仮面を手に入れるのに、そう長い時間はかからなかった。

神女団（ミメズ）から脱落していく女たちは多かったし、もともと、全体の数すらしっかり把握している統率者（リーダー）がいるわけでもなかった。

踊り続けることから、ふと我に返った女たちが神女団から抜ける際に、投げ捨てていった仮面を、フィレーナとリラは拾った。

狼（おおかみ）と犬の仮面だった。フィレーナは狼の仮面をつけた。

「また狼になったね」フィレーナがいった。

「そして、わたしは犬か……」リラが答えた。

「後から、両方合わせた狼犬（ウルフドッグ）もついて来るしね」

確かに、神女団につかず離れず、ギャッピーが追って来る。
やがて、一カ月ほどして、神女団の女たちは首都ボーに到着した。
フィレーナとリラがこの一団に出会ってから、ほぼ半数が脱落していった。
ほとんどが、行き倒れか、通りかかった街や村で男たちのなぐさみものになった女たちだ。
フィレーナとリラは、そんな女たちを助けようとしたが、あまりに数が多すぎた。
それに、彼女たちが自分の意志で脱落していくのだから、止めようもなかった。
むしろ、そのほうが女たちにとっては幸福なのかもしれないのだ。なぜなら、神女団（ミメズ）そのものが、男の相手がいなくて子供を生めない集団のヒステリーともいえる行動だ。
帝国人民の男たちに、奴隷（クレチア）並みに、なぐさみものとはいえ、抱かれるほうがよいと感じる女たちがいても不思議はないのかもしれなかった。
いずれにしろフィレーナとリラにとって理解不可能な行動ではあった。

*

首都、ボー。
海を背にして、巨大な神殿が建っている大都市だ。まわりを、高い城壁がとり囲んでいる。
その規模は、ほぼ四十キロを超え、内部には五百万近い帝国人民が住んでいる。
城壁内への通行は警備がきびしく、簡単ではないが、神女団だけはフリーパスだった。
神殿につかえるために全国から集まってくる女たちだ。

警備兵も、女であることを確認しさえすれば、何の文句もいいはしなかった。
もとより、フィレーナもリラも女だ。そのまま城壁の内部に通された。
しかし、犬のギャッピーは別だ。
城壁の外の丘から、フィレーナとリラを見つめながら、
……クィーン……
悲しそうな声を出し、その場に坐った。
ギャッピーは、そこでフィレーナとリラを待ち続けるつもりだった。
いつまでも、二人が城壁から出て来る日を……。
狼の血を引いてはいたが、彼は犬でもあった。
アマネラが死んだ今、フィレーナとリラを飼い主として愛することに決めていた。
そして、その忠誠心だけは、他のどの犬にも負けるものではなかった。
ギャッピーは待ち続けた。
食物がなくても、雨や風に打たれても、かまわなかった。
そんなギャッピーに後ろ髪をひかれる思いで、フィレーナとリラは城壁の中に入った。
なにより、首都ボーに入って、目的の人物ウトに会わなければならない。
……さよなら、ギャッピー……
フィレーナは、ふと思った。
……これもまた、死によって別れることとは別の別れかもしれない……

だが、そんな感傷にふけっている暇はない。フィレーナは前を見つめた。
……問題はこの後だ……
神女団の女たちは、首都ボーの人々の注目を浴びながら、大通りを踊りながら通っていく。
抜け出すと目立ちすぎるのだ。
「どうしよう、フィレーナ」
リラが、情けなさそうにいった。
「まいったな……。このまま行くっきゃないみたいだ」
神女団はそれから数時間踊り続け、神殿にやって来た。
神殿の前には神官たちがずらりと並んで、神女団を迎え入れる。
神殿は、高さ五十メートルを超える巨大な塔だ。
神女団は、言葉にならない嬌声(きょうせい)をあげて踊りながら、開かれた門の中に入っていった。
門の中は長い通路があり、フィレーナがいままで聞いたことのない音楽がかかっていた。
だが、女たちはそのリズムに合わせながら踊り狂う。
今までよりもさらに興奮が高まったように思えた。
「なに？　この曲……」
リラが呟(つぶや)いた。
「分かんない。僕には耳ざわりにしか思えないけど……」
「うん、わたしゃ、いろんな曲で踊れる訓練されちゃってますけどね。こりゃ、たまりません」

リラが肩をすくめた。

確かに、女たちがいくら踊りに酔っていても、今、聞こえている音楽に乗れというほうが無理に思える。気分を逆撫でにされるような曲なのだ。

なんだかムカムカして、手あたり次第に、あたりのものをぶちこわしたくなるような曲だ。

しかも、神殿の奥に進むにつれて、さらにその音は大きくなっていく。

フィレーナとリラが、耳を押さえうずくまりそうな大音響になったとき、神女団は神殿の大広間にたどりついた。

大広間に入ったとたん、音楽が止んだ。

そこには、神女団のほかには誰もいなかった。

ただ、試験管を巨大にしたような硝子の柱が、無数に並んでいた。

「なに、あれ!……」

リラが悲鳴に近い声をあげた。

フィレーナも息を飲んだ。

それは、ただの硝子の柱ではなかった。その中に、何かが入っていた。

目をこらすと、それが人間であることが分かった。

しかも、女だ。

さらによく見ると、フィレーナは口でいえないほどの衝撃を受けた。

硝子管の中の女たちは、生きてはいなかった。

そして、下腹部にあきらかに切り傷の跡があった。
……なんなんだ、これは……
なんなの……、これは……
リラは、思わずお腹をおさえた。まるで、自分が切られたかのように……。
どこからか音楽が聞こえてきた。
それには、抑揚のない歌詞がつけられていた。
「デビス、デビス、デビスに祝福あれ。神女の踊りをいただこう」
神女団の女たちは嬌声をあげた。
「デビス、デビス、デビスに祝福あれ。神女の踊りを召しあがれ……」
女たちが答える。
どこからともなく聞こえる歌詞と、女たちの歌が、何度も交錯した。
そのときだった。
天井の一角から光の渦がふき出した。
赤い光だ。その光を浴びた神女団の一人が倒れた。
……なんだ？　これは……
フィレーナは、とっさに判断した。
すくなくとも、これは殺人のための白熱光ではない。なぜなら、白熱光線なら、屍体も消えてしまうからだ。

しかし、倒れた女はそのままの体だ。

しかも……。

フィレーナは、とぎすまされた感覚で、遠くに倒れた女の気配をさぐった。

息づかいが聞こえる。

生きている。

並みの人間なら、気づくはずもなかった。

だが、フィレーナは、目の見えないときに、好むと好まざるとにかかわらずとぎすまされた感覚があった。気配を感じとる動物的な勘と呼んでもよかった。

……あの女の人が生きているとしたら、この光線は……

次々と光線に当たった女たちが倒れていく。誰も死んだ気配はない。

……だとしたら……

考えられるのは一つだった。

……麻酔的な効果のある光線……。催眠的な光線……

フィレーナは闘技士だ。だから、殺人的な意味のある光線しか使ったことはない。だがこの光線は違う。

光線は、どんどんフィレーナとリラに近づいてくる。ばたばたと女たちが倒れていく。

「リラ……」

フィレーナは、リラにささやいた。



「女として、いちばん、傷つけられてかまわない場所は？……」

「えっ？」

リラは、わけが分からず聞き返した。

ばたばた倒れていく女たちに気が動転してもいた。

「なんで、そんなこと、今、聞くのよ」

「これで傷つけるんだ、きみを……」

フィレーナが、硝子(クリスタル)ナイフを取り出した。

リラは後ずさった。

フィレーナが、倒れていく女たちと同様に、どうにかなってしまったのかと思ったのだ。

「やーよ！　女が傷つけられていい場所なんて、あるわけないじゃん！」

「そか……そうだよな……」

……だったら、僕(ぼく)一人でやるっきゃない……

フィレーナは、いきなり、リラのみぞおちをこぶしで叩(たた)いた。

先に気を失えば、少しは光線の影響を受けずに済むかもしれないと思ったのだ。

そして自分は……。意識を失うわけにはいかない。

フィレーナは、自分の手の平に硝子ナイフをつきたてた。

他人からは傷を受けても、自分から傷をつけたことのない体だ。

他人から受けたものとは違う痛みが、体中に走り抜けた。

すでにリラは、フィレーナのこぶしの一撃で足元に倒れている。
光線が迫ってくる。フィレーナも倒れた。
わざとだった。
光線を浴びる。体がみるみるだるくなっていく。
しかし、手の平の痛みは強い。
……どちらが勝つかだ……
痛みと、催眠効果との戦いだった。
気が遠くなる。
そして、光線が通りすぎたとき、ぼんやりした頭で、手の平の痛みが催眠に勝ったことを知った。
あたりをふっと見回すと、誰もが倒れていた。
防毒マスクをつけた男たちの一団が、部屋の隅から出てきた。
それぞれ、運搬車(ストレッチャー)のようなものを持っている。
どうやら、女たちを運びだすつもりらしい。
しかし、全ての女たちを運びだすには、少ない数だった。
一団は、女たちの体をさわりだした。
それは、フィレーナが聞いたことのある、男が女に対してする行為とは違っていた。
まるで、今、屠殺(とさつ)したばかりの家畜の肉塊を品定めでもしている感じだ。

なにしろ、女たちがつけている仮面をはぎとろうともしないのだ。
そして、三人に一人程度の割合で、運搬車（ストレンチャ）に乗せていく。
男たちは、とうとうフィレーナとリラのそばに来た。
どうなるのか分からないが、今は様子をさぐるしかない。
フィレーナは、目を閉じて、気を失ったふりをした。
男の一人が、リラの体にふれた。ポンポンポンと数カ所を叩き、
「よろしい、これは、なかなかだ……」
頷（うなず）いた他の二人が、リラを運搬車に運びあげた。
次は、フィレーナだった。
男は、フィレーナの胸にふれた。それは、全く医者が患者をみるように事務的だった。
そうでなければ、いくら気を失っているふりをしているフィレーナだとしても、我慢できなかっただろう。
男は、それから、フィレーナの腹をポンと叩き、尻（しり）を叩いた。
「うん、これもいい」
それから視線をフィレーナの手の平にやった。血にまみれていた。
「これは……」
男は顔をしかめた。
「手に傷を負っている。どういうことだ？」

もう一人の男が事務的にいった。
「おそらく、倒れたときにケガをしたんでしょう……ん？」
男は、硝子ナイフに気がついた。
「まったく、女のくせにこんなものを持って……」
その男が、もしも闘技の経験のある人間だったら、そのナイフを凶器と思っただろう。
しかし、この男は闘技の体験がなかった。
食事用のナイフか、野外で使う十徳ナイフのようなものにしか思わなかった。
神女団(ミメズ)は、長旅をして、この首都ボーにやって来ている。
ナイフの類いを持っていても、不思議はないと思ったのだ。
「どうします？　この女……」
「われわれが必要なのは手の平ではない。止血剤でもつけておけよ。こういう上玉は、あんまり神女団(ミメズ)にはいないからな」
上玉という言葉が出て、フィレーナはおや？　っと思った。
闘技士の男たちの間で、よく聞いた言葉だ。しかし、普通、美人という意味で使われる。
フィレーナは仮面を取られてはいない。
顔も見ないで美人もないものだと思うのだ。
しかも、別の意味で上玉というにしても、体をポンポンポンの三叩きで、それを判断するのも変だ。

手の傷を見られたとき、しまったと思ったが、それも、さして意識された様子もない。
そんなことを感じている間に、手の平に止血剤をつけられ、運搬車に乗せられていた。
そして、大広間から長い通路を運ばれていく。
前には、リラを乗せた運搬車が進んでいる。
少なくとも、リラと一緒である以上、何かのチャンスを見つけて脱出できる可能性もある。
そう信じることにした。
そのときだった。後ろのほうで、悲鳴が聞こえた。
フィレーナは、思わず、頭を上げようとしてじっと耐えた。
その悲鳴は、女たちのものだった。
その声が何を意味するものか、フィレーナにはすぐ分かった。
あまりに聞き慣れた悲鳴だった。
男であれ女であれ同じ種類の悲鳴だ。
死の絶叫――。
運搬車で運ばれた以外の女たちは、今、処分されているのだ。
それが、どういう方法かは、分からない。
いや、おそらくの見当はつくが、考えたくなかった。
……なんて、こった……
神女団の女たちは、さまざまな脱落者を出しながら、やっと首都ボーに辿りつき、そして、

今また神殿の中で殺されていく。
それも毎年何回も繰り返されるという。
……これは何なんだ……。僕の生き方も血まみれなら、帝国のおひざもとの神殿も血まみれだ……
フィレーナの怒りは、ほとんど頂点に達していた。
もし、今の状態がこうでなければ……、少なくともリラさえいなければ、すぐにでも立ち上がって、運搬車を運ぶ男たちを殴り倒していたかもしれなかった。
だが、その怒りは、まだ序の口だったのだ。
運搬車が運ばれた先は、さらに地獄だった。
長い通路の奥には、硝子に包まれた広間があった。
輝く広間は、一見清潔感に満ちていた。
しかし、そこには、金属製の台がいくつも並んでいた。
広間には、今までとはうって変わった静かな曲が流れている。
気を失っているリラには気にいらないかもしれないが、フィレーナには、ここちよく聞こえた。
だが、そこでおこなわれている行為は、女としてあまり自覚がなかったフィレーナにとっても、女として許せることではなかった。
運搬車で運び出された女たちが、順番に、金属製の台の上に運ばれる。

メスを持った男たちが、女を取りかこむ。
腹部を切られても、何かを取り出している。
取り出されたものは、試験管のようなものの中に入れられる。
そして、箱に入れられ、持ち出される。
その箱が何であるか、世間知らずのフィレーナでもよく分かった。
冷凍箱なのだ。
闘技場などで、客用に冷菓(アイスクリーム)を売る冷凍箱とさして変わらぬ形をしていた。
……いったい何を女の人たちから取り出しているのか……
フィレーナは、いきなりそれが何であるかに気づいた。
アマネラに会い、その死に立ち会わなければ、フィレーナは気づかなかったかもしれない。
血まみれでつぶされた袋のようなもの……。
血まみれで生きてきたフィレーナも直視できない悲しいもの……。
それは、女でなければ、けっしてない人体の部分……。
……馬鹿な……、こんなことが許せるか！……この女の人たち、そしてリラ、そして僕……、
こいつらは、僕らからそれを取り出そうとしている……
そう思ったとき、フィレーナは運搬車の上から立ち上がっていた。
そして、すさまじい勢いで男たちにつかみかかると、男たちが手に持っていたメスを叩き落

とした。
そして、メスをつかむと、次々に男たちを倒した。
おそらく、フィレーナ自身が信じられないほどの早さだった。
ひどく無茶な行動ではあった。
なにしろ、ここは帝国の中心の一つである神殿の中なのだ。
しかし、怒りに燃えたフィレーナにとって、それはもうどうでもいいことだった。
いつの間にか、広間の中の男たちは皆、倒されていた。
どれほどたっただろう。
この広間にいる男たちのほかに攻撃するものがいないのが不思議だった。
「……フィレーナ……？」
やがてリラの声が運搬車の上から聞こえた。
リラが、起き上がった。
メスを握って立ちつくしているフィレーナにぼんやりといった。
「何してんの、こんなとこで……」
目覚めたばかりのリラは、そこで何が起こったか、まだ、まるで把握していなかった。
「何をしてんのかって……」
フィレーナはメスを見つめた。
……いわれても困ってしまう……。人殺しさ……、僕のできることって、それっきゃなかっ

たじゃないか……』でも……

そのときだった。

うめき声がした。別の運搬車に眠っていた女が目を覚ましたのだ。

やがて、次々に女たちは目を覚ましていった。

女たちも、リラと同じように、何が起こったのかよくは分かっていないようだった。

リラの目覚めと女たちの目覚めをくらべると、リラのお腹にくらわしたこぶしで気を失わせたことは、あの麻薬光線へ対する効果にはあまりならなかったのを知って、いささかフィレーナは後悔した。

だが、それは別の意味のあることも知って、フィレーナは呆然となった。

女たちの回復が早い。

ということは、ここに倒れている男たちは、ほとんど、生身、生体の女たちから子宮を取り出そうとしていたことになる。

……何のために……

フィレーナは混乱した。

しかし、とりあえず、リラから聞かれた「何してんの、こんなとこで……」の答えだけは、確信していうことができた。

「この女の人たちを助けるためさ……」

フィレーナは、もう一度、メスを見つめた。

少しは救いになる殺しだったのかもしれない。
そのときだった。
広間の天井から白熱光がほとばしり出た。
「危ない！」
フィレーナは思わずそう叫ぶと、リラを抱いて金属製の台の下へ飛び込んだ。
悲鳴が聞こえた。
たて続けに何人もの悲鳴が響く。
それは、今、目覚めたばかりの女たちの悲鳴だった。
「……いやだ……」
リラが耳を押さえて呟いた。
そこにいたほとんどの女たちが、今、殺されているのは明らかだった。
フィレーナは、悔しかった。
あまりに強く握りしめた手の平から、先刻、止血剤で止まったはずの血がにじみでてきた。
しかし、今はどうしようもなかった。
悲鳴が止んだ。
静かだった。
人の気配はなかった。
いや、人の影ももうないだろう。

なぜなら、白熱光線をまともに浴びれば、体ごと消えてしまうのは目に見えているから。
フィレーナはメスを握りしめながら、しばらく金属製の台の下から出ないことにした。
白熱光線とまともに戦うのは自殺行為だ。
それに傍にはリラもいる。
……リラだけは、なんとしてでも救わなければ……
今、考えているのは、それだけだった。
そのときだった。
頭上から声がした。
「闘技士フィレーナだね……」
聞いたこともない冷たい男の声だった。
「かくれていないで、出てきなさい。よく、ここまで来たな……」
フィレーナはとまどった。
……僕はリトル・ラリテニアで死んだことになっている……。誰も……、少なくとも、生きている人の誰も、僕がいることを知るはずはないんだ……
「今、君を殺す気はない……。そして、もう一人の奥さんもね……。奥さんと呼べるかどうかは別にしてもね」
声は続けた。
「しかし、君が女だとは正直、驚いたよ。フィロセラのフィレーナが女だとはね」

リラが、フィレーナにささやいた。
「なんか、むちゃくちゃ知ってるみたいね。あちらさん」
「ああ……」
フィレーナは呟いた。もう、こうなったら仕方ない。台の下から出ていくしかないと思った。
所詮、こんなところにかくれていても、ここは帝国の神殿の中だ。
どんな仕掛けがあるか分からない。
相手に殺す気があれば、いつでもこちらを殺せるはずだった。
それを殺さないといっている以上、殺す気がないんだろう……と、そう思うしかなかった。
「ここから出よう……」
なんとなく嫌がるリラの手を引いて、フィレーナは、台の下から出た。
「さすが、フィロセラの後継者フィレーナだ。往生際がいいね」
声がいった。
「あんたは誰なの？」
フィレーナの代わりにリラがいった。
いつでも、リラはフィレーナのいいたいことを先にいってしまう。
「帝国の指導者だよ。黒い鎧、黒い悪魔、君たちを追い続けた者たちを指導していた者だ……」
「あのね……。人にものをいうときは姿を見せたらど～なの。失礼じゃな～い？」
リラは、精いっぱいの負けん気で、いい返した。

「見せるわけにはいかない。これから君たちと長いおつきあいになるかもしれんのでね」
「長いつきあい？……」
やっとフィレーナが口を開いた。
「ああ、戦い続ける敵としてね」
リラが口をとんがらかした。
「こんな小さなフィレーナと？」
リラとしては、これ以上、フィレーナに戦ってほしくなかったのだ。
「小さなフィレーナ？　確かに小さいことは誤算だったかもしれない。そして女であることもね……。だが、フィロセラのフィレーナであることには違いない……」
女であること……。女であるだけにフィレーナには気になる言葉だった。
そして、この声が帝国の指導者なら、その女……神女団を集めて、ここで何をやっているのかも気になった。
「ここで、女の人たちに何をやろうとしているんだ？」
「聞きたいかね」
「聞きたいわよ、女ですもん！」
リラが叫んだ。
「話せば、外部にもれる。帝国機密の一つなのでね」
……外部？……

フィレーナは、声の方向にいった。

「今、外部っていったよね。ってことは、僕たちを外部に出そうっていうの？……」

「当然だ……。でなければ殺さないなどとはいわない」

フィレーナは、まるで、帝国の指導者とやらの気持ちが分からなかった。

……助かりたい気持ちはある。しかし、ここまで来た以上……、手ぶらで助かってたまるか……。僕は、いつも死と向かいあっている闘技士だ……。だがリラは……

フィレーナは、声の主にいった。

「秘密を守る約束はする。だから、あんたと、さしで話をしたい……。このままで僕は帰れない。僕は殺されたっていい」

声は、少しの間、黙っていた。

そしていった。

「……さすが、フィロセラのフィレーナだ。話してやってもいい……。だが、その娘はどうかな……」

確かにそうだった。これ以上、リラ巻き込んでいいはずはない。

「リラを、この部屋から出してもいい？」

フィレーナは声にいった。

「いいだろう」

「ちょっと待ってよ」

あわててリラがフィレーナにいった。
「あんた、わたしをつんぼさじきにする気？」
フィレーナはリラをじっと見つめた。
「出ていってくれ、この部屋から……」
静かだがきつい口調だった。
「長くは待たせない。部屋の外で待っていてくれ」
有無をいわせない響きがあった。
リラは口ごもった。
「君は、僕の奥さんだろ……。亭主のいうことを聞けないのかい？」
それは、今までリラがフィレーナに……あんたの奥さんはわたしでしょ？……といっていたのと逆の表現だった。
リラは泣きそうな顔でいった。
「分かったわ……。でも……」
「でも？」
フィレーナは聞き返した。
「最後まで、責任とってよ。ご亭主さん……」
リラは、今にも泣きだしそうで、けれど、一生懸命、笑顔を作っていった。
リラは、広間の外に出て行った。

不思議なくらい誰もいない神殿だった。
リラは広間の外の扉の前でフィレーナを待った。
中からの声は、閉じられた扉の向こうで、何も聞こえなかった。

＊

フィレーナは、天井の声に向かって聞いた。
「あの女の人たちをどうするつもりだったんです……」
本来だったら、です……とか、ます……とかいう言葉は使いたくなかった。
なにしろ帝国に対しては、このやろう以外、なにをいったらいいのか分からないフィレーナなのだ。
しかし、今は、相手を刺激してはまずいと思うフィレーナでもあった。
……聞き出せることだけは聞き出さなければ……
帝国の指導者と名乗る声は、話し出した。
「あの女たちは、帝国の新しい人間を作るために必要なのだ」
フィレーナはわけが分からなかった。
「帝国の新しい人間？」
「われわれ、いや、君とは違うがな……。君はフィロセラ出身の旧人類といってもいいかもしれない」

「旧人類とか新しい人間とか何のことです」
声は、あくまで機械的な口調で話し続けた。
「旧人類……君たちにとってのこの世界は、とっくに滅びてしまっているんだよ。海も山も空気も……、全てがね。もののみごとに汚れている。だが、そんな世界を浄化するためには、新しい人間が必要だった。そのためには、人体が必要だ。実験のための人体だ。そこで、優秀な人間を作りだす必要があった。そのためには、優秀な組み合わせの男女が必要だ。まだ、今、帝国人民は開発途上にある。優秀な人間を作るために研究を進めるために、不良品の体の研究が必要なのだ。とはいえ、今の帝国人民が最良とは呼べない。さらに研究を進めるために、不良品の体の研究が必要なのだ。そのため、帝国人民の中の不良品の女を集める必要がある。それが神女団だ……」
フィレーナは、かぶりを振った。
「あの人たちは、実験のための道具？……奴隷よりひどいじゃないか……」
「似たようなものだ。奴隷も神女団も……」
「じゃあ奴隷の僕らは、いったい何なの……」
フィレーナは叫びたい気持ちを押さえていった。
「旧人類は、邪魔なだけだ。これから純粋な世界を作るためにはな。世界を汚した人間たちは滅びて当然だ」
「分っかんないよ、あんたのいっていること……。帝国の人が、僕たち奴隷より純粋だなんて……どこでそんなことがいえるの？」

「少なくとも、帝国人民は、今の汚れた海には弱い……。純粋な水が必要だ……」

フィレーナは、ポカンと口を開けてしまった。

いくら世間知らずのフィレーナでも、この話は馬鹿げていると思った。

……だって、海や、山や、野原を汚したのは、帝国人民じゃないか……。それが純粋な人間を作りたいだなんて……。この帝国の指導者は何を考えているんだろう……

フィレーナは語気するどくいった。

「あんたは、どういう人なの！」

「いえないね、そこまでは……。さあ、フィロセラのフィレーナ、行くがいい。そして、わたしに歯向かう気持ちがあるならやるがいい。帝国は、そう簡単には負けはしない」

フィレーナは、さらに一言、いおうとした。

しかし、そのときには、休息に広間の床が動きだし、たちまち広間の外にはじき出されていた。

リラが駆け寄って来た。

「どうだったの？」

フィレーナは黙っていた。

今の床の装置を見れば、帝国の指導者は、フィレーナが、神殿にまぎれ込んでいることを知っていて、ここまで自由にさせていたとしか思えなかった。

事実、フィレーナ自身が、闘技指導員ゼナに聞くまで知らなかったフィロセラのことすら知

っている。
なぜか、全てがしくまれているような気がして、気味が悪かった。
……僕の生きてきた全てが、帝国の指導者という人物に握られていたとするなら……
フィレーナは、むかむかしてきた。
……そりゃ、奴隷は、自分の生き方を決めることはできない。それにしたって……、あいつのいい方では、神女団どころか、帝国人民全てをあやつっているようじゃないか……
「な〜に？　亭主の秘密は奥様にも話せないわけ」
リラが、フィレーナの顔をのぞき込んだ。
「いや……聞かないほうがいいだけさ……」
フィレーナは、神殿の通路を歩き出した。
今さら元の広間に戻っても、帝国の指導者から何も聞き出すことはできないだろう。
だったら、殺さないといった言葉を信じて、素直に神殿から出ていったほうがいい。
考えなければいけないことが多すぎた。
しかし、怒りだけはいままで以上にふくれあがっていた。
リラは、フィレーナのそんな後ろ姿に、こわさを感じた。
もうそろそろ、この人にはついていけなくなるのかもしれない。
そんな思いに駆られる自分がつらくもあった。
今、フィレーナが思っていること、それはゼナの遺言にあった剣鍛冶（つるぎかじ）のウトに会うことだ

けだった。
そして、自分の生まれたフィロセラの全てを聞くしかなかった。
確かに、フィレーナは後について来るリラを、そのとき忘れたのかもしれなかった。
いきなり、通路の床が抜けた。
リラの悲鳴を残して、二人はすべり台のようなところをすべり落ちていった。
気がついたとき、そこは、神殿近くのゴミ置き場だった。
あれほどいた神官の姿は、誰も見当たらなかった。
それだけに、フィレーナの行動が、帝国の指導者とやらに、かげから見つめられているのは明らかだった。
……だったら！……
フィレーナは、狼の仮面を投げ捨てた。
居直ったといってもいいかもしれない。
……こんな仮面などいらないんだ……
……僕はフィロセラのフィレーナだッ！　絶対に帝国のいうようにはならないぞ！……
フィレーナは、リラにも仮面を取るようにいった。
二人は、仮面を取ったまま、首都ボーの街を歩きだした。
それも、街路のまん中を堂々と歩いていった。

＊

首都といっても、街の人々の日常は、地方都市のドラと変わらなかった。
フィレーナとリラの格好も、さほど街の人々と違いはない。
二人は、剣鍛冶のウトの家をさがし歩いた。
二日や三日ではさがしだせなかった。
神女団にまぎれ込んでいたときに通りすぎた街や村で、帝国人民から寄付という名で投げるようにめぐまれたわずかな水晶貨幣も、もうほとんどなくなっていた。
そんなある日、首都の職工地区にやって来た二人は、街角で呆然と立ちすくんだ。
その街角の壁に、ちらしがはってあったのだ。
「フィレーナは生きている。
永遠に……
海の魂を受けついで……
闘技士フィレーナは今も生きている……」
フィレーナとリラは顔を見合わせるよりほかなかった。
……いったい誰がこんなものを……
思い当たるはずがなかった。
しかも街を歩くにつれ、そのちらしはいたるところにはりつけられているのだ。

フィレーナもリラも、さすがに今までのように堂々と街を歩くわけにはいかなかった。
「それにしたってさ……」
ほとんど乞食同然で、橋の下で夜を過ごすフィレーナが、リラにいった。
「あれは、どう読んでも帝国に対する反逆文だよね」
「そうね。文才のあるわたしとしてもそう思う」
もしあれをはった人間が帝国に知れれば、大変なことになるのは、二人にもよく分かっていた。
第一、闘技士フィレーナ自身の存在を知っている者すら、今はほとんどいないのだ。
……誰が？……考えられるとしたら、剣鍛冶のウトだが……、それにしても剣鍛冶といわれるぐらいだ。職を持っているとしたら、みすみすそれを捨てるような危険は犯さないだろう……

しかもそのちらしのお陰で、本人のフィレーナはいい迷惑なのだ。
帝国兵の目がきびしくなるのは目に見えている。
「さがすしかないね、そいつが誰だか……」
帝国兵や黒い悪魔も、当然、さがしているはずだ。
下手をすれば、その人物をさがしているうちに、帝国兵や黒い悪魔と、かちあってしまうかもしれない。
フィレーナは、しかし今、何がなんでも自分にからむ謎の真相を知りたかった。
きっかけになるものなら何でもよかった。

……ウトをさがすこと……。そして誰があんなちらしを出しているのか……

「わたしがちらしの主をさがすわ。だから、あんたはウトさんを……」

リラがフィレーナにいった。

「えっ？」

フィレーナはいつもながらにとまどった。

口ごもるフィレーナのくちびるを、リラは人さし指で閉じた。

「何もいわないで……、夫婦でしょ……」

リラはその日から職工地区を歩き回った。

ちらしをはっている現場を見つけ、後を尾行しようと思ったのだ。

一方、同じ職工地区をフィレーナもウトをさがして歩き回った。

そして深夜、街の片隅の小さな工場の看板にウトの名を見つけたころ、リラも、夜の闇にまぎれて、あたりを気にしながらちらしをはっている男を見つけた。

ウトをさがし出した期待にふくれるフィレーナの気持ち以上に、ちらしをはっている男を見たリラの驚きは大きかった。

死んだはずの闘技作家、ネストだったのだ。

相変わらず不精ひげをはやし、酒臭い息を周囲にふりまいていた。ネストは物陰で立ちすくむリラの気配を感じ、振り返った。

第6章

フィレーナ！フィレーナ！

職工地区は、帝国人民でも、けっして身分が高い人間が住む地区ではない。
むしろ、かなりの数の奴隷(どれい)が働かされている地区だ。
商店は少なく、夜ともなると人通りはないといっていい。
だが、その工場は、深夜だというのに明かりがついていた。
しかし、フィレーナはあたりをうかがいながらゆっくりと工場の中に入っていった。
剣鍛冶(つるぎかじ)といっても、この世界の剣は、硝子(ガラス)だ。
どろどろに溶けた硝子を鋳型(いがた)に流し込み、かためていく。
小さな工場とはいえ、いたるところ硝子の輝きに満ちている。
そして、調整用に試し撃ちされる白熱光線が交錯(こうさく)し、剣の製造工場とは思えない華麗(かれい)さだ。
工場に入っていったフィレーナは、俗にいう丸腰だった。
武器を一つも身につけていない。
あの帝国の指導者らの話から考えれば、剣鍛冶のウトの存在も、帝国に知られている危険性もあった。

そこに、武器を持たずに飛び込むのは、無茶だといえた。
だが、フィレーナはかまわなかった。
自分の謎、フィロセラの謎を聞きたい一心なのだ。
フィレーナは、夜だというのに、かいがいしく働く職工の一人に聞いた。
「あのう……、ウトさんは……」
職工は何もいわず、工場の奥を指さした。
そこに、背中を丸めた老人が背を向けて立っていた。
右手に剣を持ち、どうやら、剣の出来を点検しているようだった。
フィレーナは、ゆっくりと老人に近づいていった。
……いよいよ、ウトさんに会える……
フィレーナは老人に声をかけた。
「あのう……、ウトさんですね……」
「そういうあんたは？」
フィレーナは、自分の名をいうべきか、一瞬、とまどった。
しかし、すぐ思い直した。
……ここまで来たんだ。いまさら、かくしてなんになるというんだ……
フィレーナは名乗った。
「フィレーナです……」

そういったとたん、老人は手に持った剣を、ふり向きざまにフィレーナに叩きつけた。
……な、なにを！……
一瞬早く飛びずさったフィレーナは、とっさにあたりを見回した。
すぐそばに、製造中の剣があった。
フィレーナは剣をつかみ取った。
老人はしわくちゃの顔で、あきらかに高齢者だ。もしかしたら、八十歳を超えているかもしれない。
だが、フィレーナに向ける剣先は、そうとうの腕前であることを物語っていた。
フィレーナは剣をかまえた。
「なぜ、僕を……」
老人は黙って剣をフィレーナに向けている。
そのとき、後ろで人の気配がした。それも、殺気に満ちている。
空気を斬る音がして、背後から剣が振り降ろされる。
先刻の職工だ。
フィレーナは、剣で受け止めた。火花が散った。
その火花がいつもの斬り合いの光でないことに気づき、フィレーナはいささかあわてた。
……しまった……。これは製造中の剣だ……。刃もなければ、白熱光も出ない……、ただの硝子棒にすぎない……

職工は、さらにつきかかってきた。
……こうなったら、斬るというよりもぶっ叩くしかない……
フィレーナは、跳躍した。
目の前から、いきなり飛びあがったフィレーナに職工は驚いた。
動揺は、すきを作る。
フィレーナは、職工の頭に硝子棒を叩きつけた。
パリン！
さえた音で、フィレーナの持っていた剣が割れた。職工は、わずかによろめいただけだ。
……馬鹿な！……
フィレーナは、呆然となった。
……いくらなんでも、剣を作るための硝子が、こんなに簡単に割れていいのか！……
フィレーナは、手に持った剣を見た。
だが、呆然となっている余裕はない。職工は、すぐに襲いかかって来るだろう。
……そして、ウトという老人も……
そのときだった。
「そこまで……」
老人の声が、りんと響いた。
職工は剣を引いた。そして、何ごともなかったように、剣造りを始めた。

先刻の殺気は、うそのように消えていた。

老人は、ふっと笑うと、フィレーナにいった。

「確かにフィレーナのようじゃね……、フィロセラの……」

そして、剣を置くと、いきなりフィレーナを抱きしめた。

「よく、来なすった……。先刻は、あなたを試させてもらって悪いことをした。さすが、ゼナが育てた子だ。小さいが腕前は確かだ……。さあ、もうそんな女の格好は止めて……」

確かに、フィレーナは神女団に忍び込んだときから女の姿をしていた。

だが、そこまでいって、老人は、ふっと、後ずさった。

「あなた、まさか……、本当に……」

老人は抱きしめて、フィレーナの胸のふくらみを感じたのだった。

「こんなことがあっていいのか……。フィロセラのフィレーナが、女だとは……」

フィレーナは、キッと老人を見つめて答えた。

「いけませんか？　女では……」

フィレーナは、今、男ぶるより、女と知られて、いっこうにかまわなかった。

首都ボーまでの旅が、フィレーナをそんなふうに変えていたのだ。

「ゼナは、そこまでわしに教えてはくれなかった……。フィレーナが女だとは……」

老人は、溜め息をついた。

「でも、僕は闘技士です。女であっても……。フィロセラを再建するために、ドラを抜け出し、

今は……」

フィレーナは、そこまでいって詰まった。フィレーナは、感じたのだ。海の国、フィロセラを再建するより、むしろ帝国をあやつる誰かに対する憎悪のほうが強いことを……。フィロセラよりなにより、自分があこがれ続けた海を汚したものへの怒りが強いことを……。

それはとりもなおさずに、全てを生みだしたという海を汚し、生命を生みだす女を汚したものへの怒りでもあった。

フィレーナは、老人へきっぱりといった。

「……今は、帝国をぶっつぶします。どんなことをしてでも……」

老人は、じっとフィレーナを見すえた。それから、口を開いた。

「分かった……。こちらへ来なさい……」

老人は、フィレーナを奥の部屋に通した。そして、部屋の机の上の本を取り上げた。本の下に小さなボタンが、仕掛けられていた。

老人は、ふっと笑った。

「秘密はできるだけ簡単なところにかくす。誰も机の上に無雑作に置かれた古い本の下に、こんなものがあるとは思わんじゃろう」

老人は、ボタンを押した。

一瞬、机の上に乱雑に置かれた書類や、小型ワープロをはじき飛ばすようにして、机の上板

がひっくりかえった。

そして、その下から一本の中型剣がせりあがってきた。

「ずいぶん、長い間、ここにしまってあった。もう二度と使うことはないだろうとあきらめてもいた。だが、この日が来るとはのう……」

老人は剣を取ると、フィレーナに手わたした。

それは、何の変哲もない剣に見えた。

「これは……」

フィレーナは訊いた。

「フィロセラの後継者が持つべき剣だ……」

老人は答えた。

「フィロセラの後継者？……」

「そう、その剣の名はフィレーナ……、海の魂と呼ぶ」

老人が答えた。

「僕の名と同じ……」

「そう。そして、なぜ、その剣をフィレーナと呼ぶか分かるかな？」

「見てもいいですか？　刃先を……」

「かまわんよ。あなたの剣なんじゃから」

フィレーナは、さやから剣を抜いた。そして、いささか失望もした。

とりたてて、何の輝きも見えない硝子剣だった。
フィロセラの後継者、すくなくとも一国の後継者を表すような飾りもなかった。闘技士当時のフィレーナが武器庫の中から選ぶとしても、まず、最初にはじいてしまいそうな平凡な剣だった。
フィレーナの当惑を見抜いたように、老人がいった。
「わしは剣鍛冶のウトとして長く生きているが、実は、フィロセラにいたころは、国王に頼まれ、あることを研究する学者じゃった……」
「学者？」
「そう……。そして、その成果が、この剣じゃった」
ウトはフィレーナから剣を受けとると、柄にあるボタンを見せた。
それは、剣によくある白熱光線の発射ボタンと変わりなさそうに見えた。
「これが、この剣の秘密だ……。こっちへ来るがいい……」
ウトは、フィレーナを元の工場に連れていった。
「この水を見てごらん」
それは、硝子剣……、それも硬質な硝子を作るために剣をつける溶液だった。
何度も使われたのだろう、どろどろににごっていた。
「この水に剣の光線を当ててみるんじゃ」
フィレーナは首をひねった。

……白熱光線を当てたところで、水が入った容器ごと蒸発するだけじゃないか……

「さあ、やってみるんじゃ……」

ウトが先刻からかかさない微笑でいった。

フィレーナは、いわれるとおり、剣の柄のボタンを押した。

そして、思わず息を飲んだ。

剣の先からほとばしり出たのは、いつもフィレーナが使い慣れている白熱光線ではなかった。

何色と呼んだらいいのだろう。

それは、まっ青な光線だった。

フィレーナは、この色に想いがあった。

いつもあこがれていた海の色だった。晴れた日の海の色……。

もちろんフィレーナが実際に見た、いつも赤い海の色なはずがない。

そして、たまたま汚潮に襲われる寸前、わずかに見た海の青さでもない。

それは、フィレーナが目を閉じて胸の中で見続けていた海の色だった。

立ちすくんでいるフィレーナに、ウトがいった。

「水の色を見てみるんじゃ……」

フィレーナは、容器の中の溶液を見た。

そして、思わず声をあげた。

「これは……」

容器の中の溶液は澄んでいた。
「しかも、それは真水ではない。臭いをかいでごらん」
フィレーナは、容器に顔を近づけた。
かすかに、なつかしい香りがした。それは汐の香りだった。
ウトがいった。
「そう。それは海の水だ……。その剣には、並の白熱光線を出す力はない。しかし、汚れた水を海水に変える力はある。まだわずかな力で、十メートル四方の汚水しか変えられないがな……。わしは、汚潮を元の海水に戻す研究をしていた。しかし、フィロセラと帝国の間で、とうとう戦いが始まった。研究用の装置も機械も破壊された。持ち出す余裕もなかった。妙なものを持っていたら、たちまち帝国軍に見つかってしまう。しかし、戦場では、どこにでも転がっているありふれたものもある。それは武器だ。わしは、そのありふれた剣に装置を仕掛けて、フィロセラから脱出した。いつしか、フィロセラの後継者、フィレーナにこの剣を託すためにな……。さあ、これを受け取ってくれ……」
……この剣があれば、あの赤茶色で汚れきった海を元に戻せるかもしれない……
だが、十メートル四方の汚水では、海を元に戻すなどまだまだ夢のまた夢だ……。
「ウトさん……」
フィレーナは、ウトを見つめていった。
「もっと大きなものは作れないの？　汚れた海を元へ戻すようなやつ……」

ウトは首を振った。
「無理じゃね――」
「どうして！」
フィレーナがたたみかける。
「帝国がある限りな……、海をきれいにすることなど不可能だ……」
「どうして！」
もう一度、フィレーナは同じ言葉を繰り返した。
「帝国だって、海がきれいになるのはいいと思うでしょ？　だって、汚れた海に他の人より弱いんだから……」
「いや……、そうではない……」
「えっ？」
「帝国は汚れた海だけに弱いのではない。海自体、海水自体に弱いんじゃ……」
……海水に弱い？……どういうことなんだ……
ウトはフィレーナの知らない帝国の謎をとつとつと話し始めた。
「彼らは、いわば人間が作った人間じゃ。硝子（クリスタル）の試験管の中でな。もう何百年も昔のことじゃがな。人間が生み出したのではなく、人間が作り出したんじゃ。純粋な人間を作るためとはいっても、結局は、この世界の自然に適応できない人間を作りだしたわけじゃ。海の水にすら適応できない人間をな……」

「海の水にどうして適応できないんですか？」

「最初の目的は、純粋な人間を作れば、この世界をより人間らしい世界に変えられるという目的があったらしい……。だが、結局、作り出したのは、戦い好きの今の帝国人じゃ……。これが人間の本当の姿といわれれば、あえて否定はしないがの……。奴らは、より純粋な人間を作りだそうとした。それが人間の進歩だと思ってな……。すると、皮肉なことに、この世界の自然は必要性がなくなってくる。かえって邪魔なぐらいだ。彼らは、邪魔なものは、いくら汚してもかまわないと思った。いや、自分たちの中に生まれた不良品さえ、邪魔になった。人間の進歩のために必要のないものは、自分たちの種が生みだしたものさえ始末しようとした」

「必要……」

そういえば、帝国の指導者とやらが、やたらと必要という言葉を使っていたのをフィレーナは思い出した。

「ただでさえ、この世界は人間が多すぎるのじゃからな。彼らの数が増えるにつれて、我々、古い人間との間に戦いがおきてきた。純粋というだけあって、頭はいい。しかも、戦いが好きだ。我々は勝てなかった。さまざまな国が帝国に占領されていった。純粋種ではない人間は、奴隷か属国人……、純粋種であっても不出来な人間はふり落とされていく。純粋に近づけば近づくほど、今までの純粋種は不出来になる。この繰り返しが、帝国とこの世界の歴史を作ってきた」

フィレーナにとって、なんとも不愉快な話だった。

最低下層の奴隷、そして属国人、さらに帝国人すら、純粋という名で差をつけられる。そして、帝国人のいう、最高に純粋と呼ばれる帝国人ですら、いつかは不出来と呼ばれ捨てられることになるのだ。

……純粋って何なの？……

……純粋といいながら、海を汚していいのか？……

フィレーナは、いいようのない怒りをどこにぶつけていいか……。なにしろ、帝国人すら、もしかしたら純粋という名の被害者かもしれないのだ。

フィレーナはウトに聞いた。

「それで、その帝国と最後まで戦い続けたのが、フィロセラだったんだね」

ウトは、フッと笑った。

「さあ……、それはどうかな？　帝国人種は戦いが好きじゃ。規模が大きければ大きいほど、刺激がある。フィロセラは弱っていた。滅ぼそうと思えば、いつでも滅ぼせたはずじゃ。それをぎりぎりまで残しておいた。なぜかな？」

フィレーナは、ウトのいっている意味に呆然となった。

「戦う相手が欲しいから残しておいた……、そういうこと？　闘技試合を見るだけでなく、自分もやりたかったわけ？」

とすれば、フィロセラと帝国の戦いは、ほとんどフィレーナがやってきた闘技試合の巨大版……、国家規模版ということになる。

「だが、そこまでの戦いは好まぬ帝国人民もいる。奴隷の闘技試合を見るだけで満足する帝国人民もな……。それは、彼らにとって純粋な帝国人とはいいがたい。かといって、戦争に反対者が多くでるのは面倒だ……じゃから、秘密にして、帝国の上層部だけでフィロセラの滅亡を楽しんだ。さらに、大きな戦争に反対するような帝国人民は、いくら闘技試合のような自分が参加せぬ戦いを好む人間だとしても、いずれははぶかれる不純種だ。多くの帝国人民が、今は、すでにその不純種にあてはまる。誰も自分たちが不純種だと呼ばれ、将来、はぶかれる運命にあるとしたら面白くない。じゃから純粋種のことも機密にする……。思えば、あわれじゃ……」

ウトは、遠くを見る目でいった。

「それを機密にして、フィロセラとの戦いを楽しもうとしている奴らも、いずれは不純種としてはぶかれるかもしれんのにのう……」

そこまでいったときだった。

ガシャーン。

硝子のはじける音が、工場の入口あたりでした。

硝子の炉が、次の瞬間、ふっ飛んだ。明らかに白熱光線が炉をぶち抜いたのだ。

ふきあがる煙の向こうから、ふたつの影が現れた。

黒い鎧、黒い悪魔だった。

先刻の職工が、剣を持って黒い鎧に飛びかかっていった。

だが、所詮、黒い鎧の敵ではなかった。

たちまち黒い鎧の一人の大型剣で、頭から叩き斬られ、二つに割れた。
フィレーナは当然、剣をかまえた。
今、ウトにもらったばかりのフィレーナという名の剣だ。
だが、ウトがその手を止めた。
「ここはわしにまかせて、早く行くんじゃ……」
「行くって、どこへ！……」
「この地区の北の隅、六番街地に倉庫がある。そこで、あなたの仲間が待っているはずじゃ」
フィレーナは、しかし、剣を黒い鎧に向けた。
「早く行くんじゃ。フィロセラのフィレーナは、こんなところでぐずぐずしていてはいかん！」
ウトが、まるで親が子を叱りつけるように叫んだ。
「でも！」
フィレーナが叫び返した。
「自らの役目を考えるのじゃ……。おまえの剣は何のためにある。わしがそれを渡した意味を考えろ！」
ウトはフィレーナをつき飛ばすようにして前にでると、黒い鎧の一人に体当たりした。
その瞬間、ウトの体が爆発した。そして、黒い鎧も粉々に吹き飛んだ。
どうやら、ウトは体に爆薬を仕組んでいたらしい。
さらに、爆風が工場中の硝子を飛び散らした。

工場の天井が落ち、もう一人の黒い鎧を押しつぶした。
フィレーナは、呆然としている暇はなかった。
ウトの体が爆発した瞬間に飛びずさり、工場の窓から外に飛び出した。
フィレーナの闘技士の血が、体を自然にそう動かしたのかもしれなかった。
フィレーナは、工場を振り返った。
硝石の粉をまきあげながら、工場が燃えあがっていく。
「ウトさん……」
また一人、死んでしまった。だが、もう、フィレーナは後ろを見ないことにした。
いままで積みあげられた人の死……、そのおびただしい数に思いをよせる間に、フィレーナにはやらなければならないことがある——。
フィレーナは、ウトのいっていた倉庫に向かった。

＊

倉庫に入ったフィレーナは、あまりのことにポカンと口を開けた。
そこに二つの人影がいた。
リラと——。忘れもしない、闘技作家のネストだった。
「フィレーナ……。生きていたんだな……」
ネストは、ニヤリと笑った。

それは、けっして悪意のある笑いではなかった。

「知らなかった……。お前は、リトル・ラリテニアで死んだとばかり思っていたのだが……」

フィレーナは、笑いかえしはしなかった。

笑っていられる心理状態ではなかった。

「ネストさんに助けてもらった命です。他の人にもずいぶん助けてもらいました。簡単には死にません……。でも、ネストさんも……、よく……」

ネストは、不精ひげをさすりながら答えた。

「俺は物書きだ……。書き残したものがあるうちは死なんよ」

「書き残したもの？」

「フィロセラのフィレーナについて……、帝国機密について……」

フィレーナは、地方都市ドラで死んだはずのネストが、その後、どう生きてきたかを聞いた。

「簡単なことだ。ドラの浮き草地区の地下から抜けだし、やることをやった。おまえの素性を調べ、剣鍛冶のウトさんに会い、帝国機密の一端を知った。俺も考えてみれば、帝国人民の不純種だ。帝国の本体が許せなくなった。しかし、物書きの俺ができるのは、物を書くことだ。おまえがリトル・ラリテニアで死んだと思った俺は、お前を象徴にしようとした」

「象徴？」

フィレーナは聞き返した。

「反帝国派のな……。奴隷、属国人、流民、そして、帝国内の不純種と思われている人々……、

そんな人たちに呼びかけることにした。フィロセラのフィレーナのように……、となぁ……。フィレーナは生きている。今も人の心の中に……、とな……。もちろん、おおっぴらにできるはずはない。壁のちらしや、地下組織を通した怪文書でな……」

フィレーナはネストを見つめ、聞き返した。

「地下組織……？」

聞き慣れない言葉だった。

「反帝国派の組織だ……。世界中にある。ただ、今は、それぞれ小さくて、バラバラだ。組織なんてものは、どこでもそうだが、多少の意見の違いで、互いに反目したがるものだ。目的は同じ反帝国としてもな……」

リラが肩をすくめた。

「まったく人間ちゅうのは、難しいわよねえ……。奴隷だったら、奴隷は奴隷で一つになりそうなものなのにね」

かなり偉そうな口ぶりでいった。

「意見をまとめるためには、何か共通の目的が必要だ……。それが、フィレーナ……、海の魂……、象徴（シンボル）としてのおまえの名だ……」

「でも……」

フィレーナは首をひねった。

「帝国人民は、海は苦手のはずでしょ……」

ネストは、ふっと笑った。

「ほとんど誰も、おまえの名前の意味までは知らない。要するに、帝国に逆らっている奴の名が必要なんだ。奴隷で、小さくて、それでも闘技士(ハトゥー)で、しかも帝国に逆らって脱走した。反帝国派にとって、うってつけの象徴だ」

フィレーナは笑わない。

「フィレーナの名前が利用されるって嫌(いや)だな……。僕は僕だ……。僕はやりたいようにやる」

ネストはフィレーナの肩に手を置いて、やさしくいった。

「利用されているとしたら、もう、おまえはとっくに利用されている」

「えっ？」

「帝国にだ……。そして、俺もな……」

ネストの言葉に、フィレーナは混乱した。

「……おまえは生きてきたのではなくて、帝国に生かされて来たんだ」

「どういうこと！」

リラが呆然と聞いた。

「だって、わたしたち、ほんと、一生懸命(いっしょうけんめい)助かって……そんでもって、生きて来たのよ！」

リラは、開いた口がふさがらない感じだった。

「それは訓練だったんだよ。帝国が、おまえたちにやらせたんだ……、闘技士と同じようにね……。そして、地方都市から生き残って中央へ出れるような闘技士でなければ、戦いは面白く

ない。フィロセラの戦いも、帝国のいわば娯楽だった。そして、フィロセラがなくなった今は、新しい娯楽がそろそろ必要になった。帝国への反乱という名の戦争がね……。俺は、まんまとその手にひっかかった。帝国に反乱するつもりで書いていた、ちらしも文書も、実は帝国にとっては、それが狙(ねら)いだったんだ」

……そんなことって……

フィレーナは信じられなかった。

「おまえは生き抜いて、首都ボーまでやって来た。たいした奴だ……。ならば敵の象徴として不足はない。面白い戦争になりそうだ。そんなふうに帝国の純粋種諸君は考えたんだよ」

「そんな馬鹿なことが……」

……だが、確かに、いわれてみれば、そうだ……

……反乱のために僕を利用する……

……それなら、僕とリラを、すんなり神殿から出したわけも分かる。利用価値のなくなったウトを殺すわけも分かる……

……とすると、僕の全てが、生まれてから今までの全てが、帝国にあやつられていたことになる……

フィレーナは怒りで体がふるえてくる気がした。

……だとしたら……、このネストも……

フィレーナはネストに身構えた。

「あんたも……、帝国の……」
ネストは、ふっと笑った。
「俺は不純種だよ。なぜなら、わたしはそれほど海がきらいではない。利用された口だ……」
リラが叫んだ。
「信じろったって……、信じられる!?」
「俺は、よかれと思って、フィレーナの名を利用した」
それから、フィレーナを見つめた。
「だが、利用しなかったものもある。フィレーナ、おまえが女だということだ……」
フィレーナは、ネストの目を見つめ返した。
うそをいっているようには思えない。
「いつどこで、僕が女だと……」
「ドラの地下でだ。目の見えないお前を抱いて走ったことがあったろう……」
フィレーナは、はっと、あのときのことを思い浮かべた。
ネストは肩をすくめた。
「俺は、こう見えても、一応、男だ……。抱いている人間が男か女か分からないほど野暮じゃない……だが、黙っていた……。なぜだか分かるか？……」
「なぜ？　なぜなのよ！」
フィレーナの代わりにリラが聞いた。



「なぜかな……」

ネストは溜め息をついた。

「おそらく……、おまえを好きになっていたからだろう……」

「えっ？」

フィレーナが思わず聞き返した。

「最初は闘技士として……、そして女と分かったときは……、まあ、止めておこう。リラから、いやらしいおじさんと呼ばれたくはないからな……。ただ、女なら、女らしく生きる道もある。闘技士としてではなく女としてな。あのときなら、まだ脱走した闘技士(バトラー)ではなく、女として生きれるかもしれないと思った。闘技士のフィレーナは、別に女でなくてもいい……。名前さえ使えればよい……。だから黙っていた……」

それは、遠回しなネストの愛の言葉かもしれなかった。

しかし、今のフィレーナは、それに気がつかぬほど気が高ぶっていた。

今、フィレーナが考えるのは、ネストが信じられる人間かどうかだった。

……そういえば……

と、フィレーナは思う。

帝国の指導者は、フィレーナが女であるのを知らなかった。

ネストが帝国の手先なら、当然、彼らもそれを知っていていいはずだ。

フィレーナは、少しは肩の力を抜いた。

「じゃあ、利用されているのを知った今も、なぜ、そのままちらしなんかをばらまいているんです？」

ネストは、フィレーナを見つめ返した。

「ここまで来たらやるしかないんだ……。帝国は、我々に反乱を起こさせて、だが、結局は、勝つつもりでいる……。だが、負けることは考えていない。誰も、売った喧嘩に負けるとは思っていない……。しかし、もし我々が勝ったらどうなる？」

フィレーナは、ふっと笑った。

それは、闘技士だったフィレーナの生き方と同じだったからだ。

小さくて体力のないフィレーナは、いつも負けると思われていた。

だが、勝ち抜いてきた。

「分かったよ……、ネストさん……。でも、僕は、今はもう誰からも利用されたくない……」

フィレーナに今、あるのは怒りだけだった。

帝国への……、いや、あの神殿の帝国の指導者への怒り……、これだけは落とし前をつけてやる。

「リラ……、お別れだ……」

「えっ？……」

「僕は神殿に行く……」

「無茶いわないで……」

「無茶でも行く！」
ネストがフィレーナにいった。
「まだ、おまえは、女として生きていける方法があるかもしれない」
フィレーナは、きっぱりと答えた。
「僕は、今、女でも男でもない……、闘技士だ……」
その目つきのするどさに、リラは首を振った。
最初、リラが感じている、ついていけそうもないすごみを見たのだ。
「止めて……、フィレーナ……」
フィレーナは、それには何も答えずネストにいった。
唯一、信頼できる帝国人はネストだ。
「迷惑かもしれないけれど、リラを頼みます……」
ネストは、フィレーナの目を見た。
物書きとはいえ、ネストは軍人の出身だ。そして、闘技の心得も十分にある。
相手の殺気や、やる気は見てとれる。
フィレーナの瞳にあるのは、決意という言葉そのものだった。
……それは、確かに女の瞳にあるものではなかった……。そして並みの男の瞳の中にあるものとも違っていた。
それは闘技士の目そのものだった。

……止めることはできない……
ネストも、リラと同じことを感じた。
「分かった……。リラは確かに引き受けた……」
リラの目から涙がとめどなく流れた。いよいよ予感していた日が来たのだ。
……もしかしたら、もう二度と会えないかもしれない日が……
「じゃあ……」
フィレーナは、それだけいうと、ネストに軽く頭を下げ倉庫から出て行った。
リラの顔はいっさい見ようとしなかった。見れば、決意がにぶるかもしれない。
ここまで、自分の気持ちが高ぶってしまった今、リラをつきあわすわけにはいかなかった。
考えてみれば、戦場に自分の妻を連れていくような戦士がどこにいるだろう。
それに、ネストが帝国に利用されているのなら、利用価値のある限り、ネストの命は安全ということになる。
それなら、ネストにリラをまかせたほうが、自分といるよりよほど安全のはずだった。
フィレーナは後ろを振り返らなかった。
ウトの工場から出たときと同じように……。
リラとネストは、夜の霧の中に消えていくフィレーナの姿をじっと見送っていた。

＊

フィレーナは、ウトの工場に戻った。そこは、まだ、火がくすぶっていた。
あたりには誰もいず、自動消火器が狂ったように薬剤をまき散らしている。
職工地区の火災に消防車など、もったいない。火さえ消せれば、自動消火器で十分だ。
人命救助など、奴隷の多いこの地区では無視してかまわない。
それが、帝国の考え方だった。
フィレーナは、戦場の焼け跡に足をふみ入れると、割れていない数本の剣を拾い出した。
白熱光線の具合を見る。
しっかり作動するのを確かめると、数本を腰ひもで束ね、歩き出した。
もちろん、ウトからもらったフィレーナという名の剣も手放さなかった。
そろそろ朝が近づいていた。
朝陽が首都ボーに光を投げかけるころ、フィレーナは神殿の前に立っていた。
神殿の前には誰もいなかった。
そして、まるでフィレーナを招き入れるように扉(とびら)が開いていた。
確かに、招き入れようとしているのかもしれなかった。
フィレーナの生きざまを全て知って、あやつっているとしたら、これからフィレーナが何をやるかを知っているはずだ。
そして、反乱を起こさせるのが目的なら、フィレーナがやりたいようにやらすかもしれない。
神殿の破壊――。

帝国人民の楽しみ、戦争を起こすためなら、巨大な帝国のことだ、神殿の一つぐらい安いものかもしれない。

神殿をこわせせば、フィレーナはますます帝国の敵として、象徴として、ふさわしい。

反乱を起こしたがっている人たちも立ち上がりやすいだろう。

そして戦いが始まる。

フィレーナの歩いてきた今までよりも、さらに多くの命が失われるだろう。

だからといって、フィレーナが戦いを止めたところで、今の奴隷の、いや帝国の内部自身の悲惨も変わらない。

フィレーナは戦うしかなかった。今、フィレーナの中にあるのは闘技士の血だった。

利用するなら、するがいい――。

それでも僕は戦う。

フィレーナは神殿の中に入っていった。

誰もいないようだった。

そして、大広間には、ただ硝子管の中の、生命を生みだすものを取り出された女体の死体が、帝国というものの見本のようにずらりと並んでいた。

フィレーナは、束ねた剣を一本ずつ、床に並べた。

そして一本ずつ、片っ端から白熱光を乱射させた。

やがて、何かが誘爆する音がして、天井が崩れ落ちてきた。

おそらく、爆薬のようなものが仕掛けてあったのかもしれない。
もはや、帝国の指導者とやらの意志はあきらかだった。
フィレーナに神殿を破壊させようとしている。
わざと——。
……反乱を起こさせるために……
しかし、フィレーナはかまわなかった。フィレーナは、剣の白熱光を乱射させ続けた。
まるで、狂気のただ中にいるように——。
まさに、今のフィレーナは狂気そのものだったかもしれない。
怒りだけが、闘技士の血だけが、今のフィレーナだった。
その日から、フィレーナの姿は首都ボーから消えた。
リラとネストには何の連絡もなかった。その生死すら分からなかった。
数日後——。
やっとデビス帝国の新聞、帝国日報中央版(デビスニュース)に、大きな記事が載った。
……デビス帝国大神殿で火災——。ただし、被害は最小限に食い止められた。
だが、神殿の近くに来た者は、誰もその報道を信じられなかった。
なにしろ、その大半が吹き飛ばされていたのだ。

＊

それから一年ほどたったころ、どこからともなく、あるうわさが広まった。
……あの神殿を破壊したのは、フィレーナという脱走奴隷だ……、というのだ。
やがて、帝国のいたるところで、自分がそのフィレーナだという者が出てきた。
それは、女もいれば、男もいた。もともと、フィレーナはありふれた名前だった。
海洋民族系では、どこにでもある名前だ。その名に男女の差はない。
そのうち、山岳民族系の属国にも、放牧民族系の属国にも、フィレーナという名をかたる者がふえてきた。
そして、その広がりは、帝国内の人民にすら波及した。
二年後――。
地方都市、ドラの闘技士たちが、フィレーナという名を合言葉に反乱を起こした。
その反乱は、ただちに鎮圧されたものの、その影響は大きかった。
各地方都市の闘技士やその他、戦う術を知らない奴隷たちまでが、反乱を始めたのだ。
口々にフィレーナの名を叫びながら――。
そして、その反乱の一つ一つの首領、指導者たちは、フィレーナの名を名のった。
やがて、反乱は、属国人まで巻き込みだした。
……フィレーナ！……
……フィレーナ！……
どの反乱もフィレーナだった。

帝国に対する反抗は、全てがフィレーナだった。
さらに、帝国人民の中の犯罪にまで、フィレーナ団などと呼ぶギャング団が現れだした。
フィレーナがあまりに多すぎて、帝国も手がつけられないありさまになりそうだった。
各地で立ち上がった数多くの反乱軍の指導者フィレーナの中に、帝国の南部海岸、おだやかな海岸線、温暖な気候……、珍しく青い海……、そこは、帝国人民ですら、不純粋なら、リゾートタウンにしたい土地……、その近くにある軍事試験場付近で、海洋民族系の奴隷をひきいて蜂起した男がいた。
そのフィレーナは、男なのになぜか長い髪を汐風になびかせ、白熱光の出ない今どき珍しい剣をふるって、反乱軍の先頭に立っていた。
ただ、その剣からほとばしり出る不思議な光は、破壊力はないものの、なぜか、人の心をなごませる力を持っているという。
その剣の名もやはりフィレーナと呼ばれていた。
そして、男は、一頭の犬を連れていた。
その種類は、今やほとんど見ることのできない狼犬(ウルフドック)だという。
いずれにしろ、帝国内にフィレーナは多すぎ、その名前は、永遠に続きそうだった。
少なくとも、今は——。
永遠のフィレーナ——だった。

第3部　完

あとがき

ごぶさたしております。
おぼえていてくださいましたか。
「永遠のフィレーナ」とそのあとがきを――。
そんなあとがきを書いたフィレーナの第2巻（光への脱出）から、もう二年もたってしまいました。
これでは、もう一度、おぼえていてくださいましたか、と書かねばなりませんね。
ごめんなさい。遅れに遅れて……。
おっと、この台詞も、第2巻に書いた気がします。
あやまり続けていると、みなさんもうんざりするでしょうし、僕もペコンペコン頭が重くなるような気がしてきたので、ここらで、この話題はやめておきます。
さて、実は昨年病気で一カ月ほど入院しました。いえ、そんなに重い病気ではなく、ま、お酒の飲みすぎのようなものです。
そこは大病院で、さまざまな病気の方が集まってきます。

そして生命というものを、どうしても考えさせられてしまいます。

だからでしょうか。

今回は、生きるということ、生命を生みだすというようなことにこだわったフィレーナになってしまいました。だからこそ、フィレーナは怒るのです。

僕の下手な文章で、フィレーナの怒りが分かっていただけるとうれしいのですが——。

さて、今回のフィレーナで、全体のパート1ともいえる部分がやっと終わりました。

次のフィレーナは、数年先のフィレーナが描かれる予定です。

数年先の話ですから、原稿も何年先になるか分かりません、などといったら、編集さんにどやされるでしょうか?……（もうあきらめているよ、遅れには……編集㊦）

多分、イラストの高田さんも同じ気持ちでしょう。

フィレーナ以上にみんな怒っています。

ごめんなさい。

あやまりだすと、またくりかえしになりますので、ここらで失礼いたします。

ともかく……。

フィレーナの戦いは今も続いています。

首藤剛志

アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 3
悪夢への挑戦

N-037

1988年7月31日 初刷

著者 首藤剛志
発行者 尾形英夫
東京都港区新橋四―一〇―一 〒一〇五―五五
発行所 株式会社 徳間書店
電話〇三(四三三)六二三一(大代)
振替 東京四―四四三九二番
印刷 大日本印刷株式会社
製本

〈編集担当 吉田勝彦〉

ISBN4-19-669588-4C0174 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

無限に広がる首藤剛志ワールド

★痛快冒険活劇

～戦国魔神ゴーショーグン・シリーズ～

戦国魔神ゴーショーグン 絵/なにわ♡あい
その後の戦国魔神ゴーショーグン 絵/なにわ♡あい他
狂気の檻 絵/天野喜孝
覚醒する密林 絵/天野喜孝
時の異邦人 絵/天野喜孝
はるか海原の源へ 絵/天野喜孝
幕末豪将軍 絵/さかもとえみ 定価420円

★オリジナル・ヒロイック・アドベンチャー

永遠のフィレーナ1 絵/高田明美
永遠のフィレーナ2光への脱出 絵/高田明美
永遠のフィレーナ3悪夢への挑戦 絵/高田明美 定価420円

★美少女ファンタジー

～ミンキーモモ・シリーズ～

いつかきっとピーチブック 絵/わたなべひろし他
それからのモモ 絵/わたなべひろし&けいこ
夢の中の輪舞(ロンド) 絵/わたなべひろし&けいこ

※定価は表示のあるもの以外すべて380円

永遠(えいえん)のフィレーナ 3 悪夢(あくむ)への挑戦(ちょうせん)

支配者デビス帝国に滅ぼされた、フィロセラの王女フィレーナは男奴隷の闘技士(バトラー)として育てられた。しかし自分の出生を知り、故国再興の鍵を握る首都ボーの剣鍛冶(かじ)ウトに会うため、女奴隷のリラとともに脱走する(第1巻)。途中、帝国の刺客・黒い悪魔の謀略で目を負傷したフィレーナは、反帝国ゲリラのラリスに助けられる。だが、再び黒い悪魔に襲われ、彼の犠牲によって死地を脱したとき、フィレーナの前には海が広がっていた(第2巻)。しかしその海は汚染されていたのだ……。

女戦士はついに帝国の打倒を決意する。第1シリーズ完結篇！

カバーイラスト＝高田明美
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱

徳間書店
アニメージュ文庫
ISBN4-19-669588-4 C0174 ¥420E (0) 定価420円

